

烏帽子会会報

2019年春号 Vol.66



白衣授与Student Doctor認定式 集合写真(H31.3.9)

- 第38回烏帽子会總會のご案内 3 p
- 教授 就任 挨拶 5 p
- 教授 退任 挨拶 9 p

福岡大学医学部同窓会

目 次

・ 総会案内				
第 38 回烏帽子会総会のご案内			3
・ 会長挨拶				
御挨拶	高 木 忠 博		4
・ 教授就任挨拶				
教授就任のご挨拶	平 井 郁 仁		5
教授就任挨拶	平 川 浪 大		6
教授就任のご挨拶	秋 吉 浩 三		7
教授就任挨拶	渡 部 雅 人		8
・ 教授退任挨拶				
私と皮膚科学	中 山 樹 一 郎		9
福岡大学在任 26 年 6 か月を振り返って	中 安 波 洋 一		11
31 年の重み	渡 辺 憲 太 朗		14
教授退任のご挨拶	向 野 利 寛		15
教授退任に寄せて（自己を振り返って）	前 川 隆 文		16
医師生活の極意	柳 瀬 敏 彦		18
教授退任挨拶	山 浦 健		19
・ 募集要項				
研究奨励賞募集要項／在外研修援助金募集要項			20
・ 在外研修報告				
海外留学報告	後 藤 昌 希		21
Khon Kaen 大学で行われた 4 th ICEM を経験して	岡 本 峻 和		22
在外研修生一覧	金 子 竣 竣		31
・ 学会開催報告				
第 121 回日本小児科学会学術集会報告	廣 瀬 伸 一		32
第 11 回日本蘇生科学シンポジウム開催の報告	廣 瀬 伸 一		33
「第 1 回禁煙推進学術ネットワーク学術会議」および				
「第 1 回市民で地域禁煙を推進する会（公開講座）」合同学術集会	朔 啓 二 郎		34
第 4 回日本心臓リハビリテーション学会九州支部地方会開催報告	三 浦 伸 一 郎		36
第 32 回日本消化器内視鏡学会九州セミナー、				
平成 31 年 1 月 27 日（日曜日）開催報告とお礼	八 尾 建 史		37
・ 学生会員支援報告				
白衣授与式を終えて	小 川 由 莉		38
・ 支部だより				
大塩善幸先生を囲む会	浅 倉 敏 明		39
中村卓郎先生の慰労会	浅 倉 敏 明		40
大分県支部会（かぼす会）便り	鬼 木 寛 二		41
・ キャンパス便り				
平成 30 年度 烏帽子会賞受賞者名簿			42
第 70 回西医体準優勝のご報告	八 代 明 奈		42
全医体優勝のご報告	柳 邊 崇 志		43
平成三十年秋季リーグ戦 優勝	中 谷 裕 貴		44
烏帽子会賞を受賞して	長 瀬 愛 俊		45
第四回全国医学生 BLS 選手権を通して～九州予選：総合優勝、全国大会：部門優勝～	大 牟 田 陽 俊		46
福岡大学医学部同窓会 烏帽子会賞褒賞基準			47
・ 計 報				
坂本公孝 泌尿器科名誉教授を偲んで	吉 田 一 博		48
追想 坂本公孝名誉教授	松 岡 弘 文		49
江崎廣次教授を偲んで！	馬 郷 良 英		50
・ 医局長・医長名簿			52
・ 教育職員人事			53
・ 事務局だより			53
・ 編集後記			（裏表紙）

同窓会ホームページ共通 ID、パスワード

ID : eboshikai
パスワード : fukudai1 (数字)



ホームページ用二次元
バーコード

第 38 回烏帽子会総会 開催要領

第 38 回烏帽子会総会へのお誘い

主幹事学年：
22 回生代表 前川 信一
(福岡東医療センター 呼吸器外科)



副幹事学年：
32 回生代表 永田 旭
(福岡大学筑紫病院 外科)



平成から令和へ。

この記念すべき年の第 38 回福岡大学医学部総会：烏帽子会総会を、22 回生と 32 回生の実行委員が一丸となって準備を進めております。

今年のテーマは「絆」。5 世代の卒業生の間位置する 22 回生は、人と人との絆を大切に、先輩方が築き上げてきた大切なものを後輩へ伝えていく役目があると考えています。

また伝統を伝えると同時に、最先端のものも学んでいこうと、今回の講演には日本での人工知能の先駆者、山田誠二先生をお招きし、医療分野における人工知能の役割などについて非常に興味深い話をさせていただく予定です。

令和元年の記念すべき年です。

沢山の方々に参加頂き、絆を深め大いに盛り上がって頂ければ幸いです。

日 時：令和元年 7 月 6 日 土曜日

会 費：5,000 円

場 所：ソラリア西鉄ホテル 8 階

福岡市中央区天神 2-2-43 電話 (代) 092-752-5555

総 会：17:00 ~

講演会：17:40 ~

山田誠二先生 (人工知能学会第 16 代目会長)

『人工知能 AI の現在と AI 社会 ~これからの医療教育~』

懇親会：19:00 ~

*当日は託児所を準備しております。

ご出欠のご返事を、巻頭の綴り込みの葉書で**6月20日まで**にお送りください。

会長挨拶

75.2%

烏帽子会 会長 高木 忠博 (1 回生 脳神経外科クリニック高木 院長)



この数字は、今年の国試結果で衝撃的でした。何故?と全員が、色々考えたと思います。

小生は、大きくは皆の respect する感覚の不足が創り出した結果ではないだろうか?と思いました。「敬う。」と云う英語の言葉ですが、欧米人は良くこの言葉を使う様に思います。今年はラグビーワールドカップが、日本で開催されます。参加国の中にアイルランドがありますが、この国の世界ランキングは、3位と思います。この国はアイルランド紛争で南北に分断されて長く血みどろの紛争を重ねてきました。その様な国が、ラグビーワールドカップになると、全く一つに為って、世界3位の強豪になる過程の話がBSで放送されていました。その中で世界一に為りたいと思った時には、人間はこの respect の気持ちを持って人と接しなければ一つになれない。と選手、監督が4-5の事柄への respect を話していました。そして、これが出来た時に選手に

「shoulder to shoulder」(肩寄せ合う一体感)と云う感覚がチームに生まれチームが、初めて強く為ると話していました。国試100%成就の話も基本的な所は、全く同じ発想ではないでしょうか。相手を respect する為には自分自身が、先ず自分が大人に成熟し大人の考え方に成長して行かねばなりません。何かアングロサクソン系の方が進んでいる様に感じますが、小生は、日本の昔から使われている「ありがとう。」の感謝の言葉の中に respect の意味が含まれていると思います。真剣度、真摯度で結果に大差が生まれて来る様に思います。小生、学生も含め皆がモウ一度御互いを respect して事にチャレンジしましょう。



教授就任挨拶

教授就任のご挨拶

福岡大学医学部 消化器内科学 教授 平井 郁仁 (14 回生)

平井 郁仁
教授 略歴平井 郁仁 (ひらい ふみひと)
生年月日: 昭和41年(1966年)3月4日(53歳)

昭和59年3月
熊本県立玉名高等学校卒業
昭和60年4月
福岡大学医学部入学
平成3年3月
福岡大学医学部卒業
平成3年6月～平成4年5月
福岡大学筑紫病院内科・消化器科
臨床研修医
平成4年6月～平成5年8月
福岡大学病院内科I・II臨床研修医
平成5年4月～平成9年3月
福岡大学大学院医学研究科
(病態構造医学系)
平成9年4月～平成10年5月
天陽会中央病院内科
平成10年6月～平成12年11月
福岡大学筑紫病院消化器科医員
平成12年12月～平成16年3月
佐田厚生会佐田病院胃腸科部長
平成16年4月～平成17年9月
福岡大学筑紫病院救急部助手
平成17年10月～平成17年11月
福岡大学筑紫病院救急部併任講師
平成17年12月～平成19年3月
福岡大学筑紫病院消化器科併任講師
平成19年4月～平成26年9月
福岡大学筑紫病院消化器内科講師
(平成22年10月より「消化器内科」に名称変更)
平成26年10月～平成29年3月
福岡大学筑紫病院消化器内科准教授
平成29年4月～平成31年3月
福岡大学筑紫病院炎症性腸疾患センター
部長・診療教授
平成31年4月～現在
福岡大学医学部消化器内科学講座
主任教授

平成31(2019)年4月1日に福岡大学医学部消化器内科講座の主任教授に就任しました平井 郁仁(ひらい ふみひと)です。平成は31年で終わり、2019年5月から令和が始まります。この過渡期に教授を拝命しましたので、ある意味儀式的に使われている「平成最後の」で修飾するならば「平成最後の年に誕生した教授」でしょうか。私は平成3年の福岡大学医学部の卒業で、私の医師としてのこれまでのキャリアは平成という時代とともにあったと言っても過言ではありません。少し寂しい気もしますが、新たな気持ちで出発する私にとってはこれ以上ない一区切りと幕明けになると言えるかもしれません。

烏帽子会会員の皆さまに自己紹介を含めたご挨拶をさせて頂きたいと存じます。私は福岡大学医学部卒業後、直ちに福岡大学筑紫病院内科消化器科に入局致しました。大学院に進み、当時の八尾恒良教授に「クローン病の長期経過」を研究テーマとして頂きました。経過・予後が不良となる頻度やそのリスク因子を解析した結果で、平成9年に博士号を取得しました。大学院修了後は、消化器内科領域の臨床修練に明け暮れました。この20年で消化器内科の臨床は大きく変革しました。消化管分野では、消化管癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術など内視鏡的治療の進歩、カプセル内視鏡やダブルバルーン小腸内視鏡に代表される小腸検査の開発と普及、そして炎症性腸疾患に対するレミケードなど分子標的薬の登場などがあげられます。幸せなことに私はそれらの発展過程を全て経験し、自身の消化器診療の軸軸にすることができました。また、それらを題材とした主に臨床的な研究成果を論文化し、世界に発信致しました。このことが主任教授就任にもつながったと思っています。

これから10数年にわたって教室を盛り立てていかなければなりません。大学医学部の講座ですので、教育、診療、研究と3つの柱を屹立させる必要があります。教育面は臨床中心の病院に長く勤めていたため不慣れですが、基本的にはわかりやすく、記憶に残るような講義や指導を学生、大学院生および教室員に行っていきたいと思っています。診療面では、優れた臨床医を育て、福岡大学病院の理念である患者さん中心のあたたかい医療を提供したいと思っています。研究面では、これまで培ってきた臨床研究に加え、基礎医学の先生方とも協力して消化器病学の発展に寄与していきたいと考えています。

令和には「人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という意味がこめられているそうです。元号の出典となった万葉集からの言葉を借りるなら「梅の花のように、教室員が明日への希望を咲かせる医局でありますように」と願ってこれから医局を運営したいと考えています。新任の教授で頼りない面はあるかもしれませんが、烏帽子会の先生方におかれましては、暫くの間、あたたかく見守って頂けたら幸いです。今後のご支援、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

教授就任挨拶

福岡大学医学部 内分泌・糖尿病内科学 主任教授 川 浪 大 治 (21 回生)



川 浪 大 治
教授 略歴

平成 4 年 3 月
福岡大学附属大濠高等学校卒業

平成 4 年 4 月
福岡大学医学部医学科入学

平成 10 年 3 月
同上 卒業

平成 10 年 4 月
虎の門病院内科研修医

平成 12 年 4 月
東京慈恵会医科大学大学院
医学研究科博士課程入学
入学後、東京大学へ国内留学

平成 16 年 7 月
同上 修了

平成 18 年 8 月～22 年 6 月
米国 Case Western Reserve 大学
留学

平成 25 年 2 月
東京慈恵会医科大学
糖尿病・代謝・内分泌内科 講師

平成 30 年 6 月
同上 准教授

平成 31 年 4 月
福岡大学医学部
内分泌・糖尿病内科学講座
主任教授

このたび、内分泌・糖尿病内科学講座を担当させて頂くことになりました川浪大治と申します。私は卒業以来、今日に至るまで福岡大学を離れて勤務しておりました。教授として母校に帰ってくる事が出来たのは望外の喜びであり、同窓会ならびに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

当講座は前任の柳瀬敏彦教授のご尽力により開設から 10 年で大きな発展を遂げてきました。私自身が培ってきた経験や視点を加え、伝統を形づくることに私に課せられた使命であると考えています。私は虎の門病院での研修医時代に 1 型糖尿病患者の透析導入を担当したことをきっかけに、糖尿病合併症について学びたいと考え、小林哲郎先生（山梨大学名誉教授）のご紹介で田嶋尚子先生が主宰されていた東京慈恵会医科大学糖尿病・代謝・内分泌内科に入局し、のちに主任教授になられた宇都宮一典先生のご指導を受けてまいりました。大学院在学中に東京大学で永井良三先生（自治医科大学学長）、前村浩二先生（長崎大学循環器内科教授）のご指導のもと、血管生物学の研究に従事する機会に恵まれました。米国留学から帰国後は、糖尿病腎症を中心に研究を進め、病棟医長、外来医長、医局長を務めながら糖尿病、内分泌疾患の診療に当たって参りました。オープンマインドな恩師たちの中で様々なチャンスを与えて頂きながら働いた経験は私にとって心の支えであり、矜持でもあります。教育面では、「医師になること」が目標ではなく「医師になって何をするか」という目標を持った学生に多く接し、教員として、やりがいを感じる日々を過ごしてきました。私は、もっと多くの福岡大学の学生がこのようになれるはずだと強く信じています。そして他学で勤務してきた経験から、同じ目標に向かう者であればそのバックグラウンドとは関係なく、スクラムを組んで前進できるという信念を持っております。

医師になってからの 20 年は自分のための時間でしたが、これからの 20 年は福岡大学医学部の発展のために捧げる時間であると考えています。私心を捨て、福岡大学医学部の発展に貢献できるよう、微力の限りを尽くす所存です。ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

教授就任のご挨拶

福岡大学医学部 麻酔科学 教授 秋 吉 浩三郎 (特別会員)



秋 吉 浩三郎
教授 略歴

学歴／

1990年3月
久留米大学附設高等学校卒業
1990年4月
九州大学医学部医学科入学
1996年3月
九州大学医学部医学科卒業

略歴／

1996年5月
九州大学医学部附属病院麻酔科
蘇生科研修医
1997年10月
福岡市立こども病院麻酔科勤務
1998年2月
九州大学医学部附属病院麻酔科
蘇生科研修医
1998年4月
九州大学医学部附属病院麻酔科
蘇生科医員 (救急部兼務)
1999年4月
九州大学医学部附属病院麻酔科
蘇生科医員
2000年10月
九州大学医学部附属病院手術部助手
2001年4月
国立病院九州医療センター麻酔科医師
2004年4月
福岡県済生会福岡総合病院麻酔科医長
2005年4月
独立行政法人国立病院機構
九州医療センター麻酔科医師
2005年10月
九州大学病院麻酔科蘇生科医員
2006年4月
九州大学病院麻酔科蘇生科臨床助手
2007年7月
九州大学病院特任助教医師不足分野等
教育指導者 麻酔科蘇生科勤務
2008年4月
九州大学病院麻酔科蘇生科臨床助教
2008年12月
オレゴンヘルスアンドサイエンス大学
麻酔科リサーチフェロー
2010年12月
九州大学病院麻酔科蘇生科臨床助教
2011年2月
九州大学病院麻酔科蘇生科助教
2013年4月
九州大学病院手術部助教
2015年4月
九州大学病院麻酔科蘇生科講師

平成31年4月より福岡大学医学部麻酔科学教授および診療部長に就任いたしました。多くの先輩が築かれた伝統あるこの講座を主宰させて頂くことは非常に重責ではありますが、公私の全てをもってこの職責を担う所存です。

麻酔科学の基礎は麻酔・周術期管理、集中治療、疼痛治療であり、全ての麻酔科医が精通する必要があります。しかし現在の麻酔科学は、この基礎に加えて、救急医療や緩和医療、周術期の栄養管理や安全管理、内科的治療の鎮静管理など、多数の学問が集合した広範囲の医学・医療の分野となりました。医療の高度化が進んだ現代では、より良質な医療を提供するために複数の診療科・メディカルスタッフが協力し合う、集学的医療が求められます。福岡大学病院はハートセンターや総合周産期母子医療センターなど、各診療科の垣根を越えたチーム医療を実践しています。我々は周術期医療の基礎を担うだけでなく、こうしたチーム医療の中心として、病院機能の中核を担っていくことも求められています。さらに安全・危機管理部門および医療経済面など、我々が貢献すべき分野は益々広がっており、麻酔科医はまだ不足していると言わざるを得ません。“医療のプロフェッショナルとしての誇りと広い視野を持ち、患者に寄り添い、地域社会に貢献する医師を育成する”という福岡大学医学部のミッションは、まさに本講座が目指す麻酔科医像と一致します。教育機関である大学の使命として充実させ、より良い教育を行うシステムを確立、幅広い基礎的医学知識と技術を修得し、患者や医療従事者と心から理解し合える豊かな人間性を兼ね備えた医師の育成に努める所存です。

また、高度な研究は大学の特権とも言うべき命題であり、医学の進歩に貢献する使命があります。総合大学である福岡大学の利点を生かし、医学部の他教室だけでなく他学部との連携・支援を受けながら、様々な臨床研究や基礎研究を進めていく所存です。

教室全体として非常に若く、まだまだ力不足とは存じます。しかし、若い力を活かして、福岡大学医学部の発展に少しでも貢献できるよう努力していく所存です。皆様の応援とご指導をお願い申し上げます。

教授就任挨拶

福岡大学筑紫病院 外科 教授 渡部 雅人 (特別会員)



渡部 雅人
教授 略歴

(1) 学歴

1981年4月～1984年3月
久留米大学附設高等学校

1985年4月～1991年3月
九州大学医学部医学科

1996年4月～2000年3月
九州大学大学院医学研究院
医学専攻

(2) 職歴

1991年5月～1992年5月
九州大学医学部附属病院
第一外科 研修医

1992年6月～1993年5月
福岡通信病院外科 研修医

1993年6月～1994年5月
国立小倉病院外科

1994年6月～1996年3月
国家公務員共済組合連合会
浜の町病院外科

2000年4月～2002年3月
山口赤十字病院外科副部長

2002年4月～2005年3月
大阪回生病院外科医長

2005年4月～2007年9月
九州大学大学院医学研究院
臨床・腫瘍外科助教

2007年10月～2019年3月
北九州市立医療センター外科
部長

2019年4月～
福岡大学筑紫病院外科教授

平成31年4月1日付で福岡大学筑紫病院外科教授に就任いたしました渡部雅人と申します。初代有馬純孝教授、2代目前川隆文教授に続いて、私が3代目となります。筑紫医療圏の基幹病院である福岡大学筑紫病院で働くことになり身に余る光栄に存じます。筑紫病院外科は消化器外科および呼吸器・乳腺内分泌外科を担っており、それぞれ福岡大学病院と連携して診療にあたっております。

私は平成3年に九州大学医学部を卒業し第1外科（現臨床・腫瘍外科）に入局しました。外科専門医を取得後、大学院に入学し肝胆道外科の基礎研究で学位を取得しました。消化器外科専門医を取得後、平成17年から九州大学の助教を務め、肝胆膵および上部消化管グループで修練しました。そして平成19年から北九州市立医療センターに外科部長として勤務し上部消化管外科を専門としました。

前任地では、年間25例（県内第3位）の食道癌手術をすべて胸腔鏡下に行い、岩崎昭憲福岡大学教授が会長を務められた第31回日本内視鏡外科学会ではパネルディスカッションで発表させて頂きました。また、すべての胃癌手術を早期癌に対して切除も再建も体腔内で行う完全腹腔鏡下手術を平成20年より開始して平成30年まで1001例行っています。昨年公開された国立がん研究センターのデータでは、胃癌術後5年生存率は全国13位、九州1位で、長期予後も優れていました。今後は筑紫病院での業績を評価されるように全力で取り組みます。

筑紫病院外科は日本大腸肛門病学会の認定施設で専門医も複数名在籍しており、長谷川傑福岡大学教授と連携して腹腔鏡下手術の普及を喫緊の課題としています。炎症性腸疾患に関しては今後も二見喜太郎准教授に診療して頂きます。

肝胆膵外科はこれまで専門医が不在でしたので肝胆膵高度技能専門医を1名招聘しました。筑紫病院外科も修練施設の要件を満たし認定申請する予定です。

呼吸器・乳腺内分泌外科は、これまでも肺および縦隔疾患の手術の約9割を胸腔鏡下で行い、術後合併症は少なく経過順調な症例がほとんどでした。山下真一准教授が福岡大学病院より赴任され、さらに高度な診療が可能になります。

筑紫医療圏におきましても、今後ますます高齢化が進み、悪性新生物の入院患者推計は増加傾向にあり、基本理念である「あたたかい医療」を行ってまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

教授退任挨拶

私と皮膚科学

福岡大学医学部 総合医学教育センター（皮膚科） 名誉教授 中山 樹一郎（特別会員）



大学を卒業して皮膚科に入局したが学生時代に特に皮膚科に興味があったわけではなく、当時皮膚科志望が大変少なく、皮膚科医になれば私でも何か社会に役立つことがで

きるかもしれないといった茫洋とした理由だったように思う。しかし、皮膚科に入って次第に焦りを覚えた。というのが、人数が少ないと逆に一人一人が大変目立ち、不勉強がすぐに露呈してしまうことに気づいたからである。そこで一念発起して谷から飛び降りるつもりで大学院に進学させてもらい、その後は不思議なことにアメリカに留学した時以外一度も病院出張もなく大学で仕事をした。福岡大学の定年が70歳だったので、九州大と福岡大の2つの大学で計40年以上お世話になったことになる。

私の主な研究領域は何かと聞かれたら、メラノーマ、乾癬、レックリングハウゼン病を挙げられると思うが、あまり学術的に誇れるものはない。ただ、私は臨床医として治療に直結する研究が何かできないかということに常に考えてきた。

メラノーマに関しては、足のメラノーマが他院で切除後再発し次第に同側の下肢全体に転移、腫瘍形成を生じた症例を病棟医長の時に経験した。自分の仕事を辞めて患者さん（奥さん）に付き添っていたご主人の懸命の看護の姿を未だに忘れない。私に何かできないか、と必死に考えてたどり着いたアイデアが温熱局所灌流療法（Hyperthermic Isolated Limb Perfusion, HILP）であった。当時の九大付属病院

の杉岡病院長（整形外科教授）に相談に行き承諾を得て心臓外科医の協力の下、下肢のメラノーマ再発例に1例目のHILPを施行した。その転移巣に対する効果はこれまでには見られない劇的なもので、病理組織学的に転移したメラノーマ細胞の明らかな壊死像が観察された。術中灌流動脈血中にカルボプラチンとIFN-βを注入して相乗効果を期待した。本療法に保険適応がなく治療費が高額になるため高度先進医療の申請を行った。しかし、上記IFN-βの動注は保険適応なしという理由で却下された。確かにIFN-βは腫瘍局所投与しか保険的には認められていなかった。残念ながら本邦ではその後の本療法の進展はないようである。

乾癬に関しては、私が九大皮膚科助教授の時ギリシャでの学会で、当時サンド薬品（現ノバルティスファーマ）が発売したシクロスポリンという免疫抑制剤のシンポジウムに出席したのが乾癬治療に携わるきっかけとなった。当時はまだ乾癬が免疫異常で引き起こされるという概念が確立されていない時代であったが、実際重症例に免疫抑制剤のシクロスポリンを投与してみてこれまでにない良好な効果に驚嘆した。東京大、札幌医科大、東海大との合同研究を5年間行い、その効果と副作用をまとめて論文発表した。その後免疫学的製剤の研究開発が目覚ましいスピードでなされ、TNF-α、IL-23あるいはIL-17に対するヒト型あるいはヒト化単クローン抗体製剤の治療につながっている。こういった免疫学的製剤の基礎的あるいは臨床的側面を詳細に理解するため関連論文を時間のある限り読んだ。これまで私は福大病院と福大筑紫病院でおそらく計100例以上の重症乾癬患者に種々の上記生物学的製剤を投与してきた。高額な医療費はかかるが、本療法により患者さんたちの

QOL (生活の質) 向上に少なからず寄与してきたと感じている。

レックリングハウゼン病 (神経線維腫症 I 型、neurofibromatosis type1, 以下 NF1 と略) は神経皮膚症候群の代表的な遺伝性疾患で皮膚にカフェオレ斑や神経線維腫を生じる。NF1 研究のきっかけや私の治療研究内容については今回福岡大学退職に伴い編集部からの原稿依頼があって福岡大学医学紀要に書いているのでここでは触れないが、まさに大きな岩にぶつかっては跳ね返される、その繰り返しであった。私の研究が患者さんやその親族の方々にとだけ貢献できたのか、振り返ると甚だ心もとないが、ただここで強調したいことは九大、福大時代ともに研究仲間ができ、また基礎研究室の大きな支援があり、30 年間 NF1 の治療研究が続けられたことであ

る。本当に感謝以外にはない。

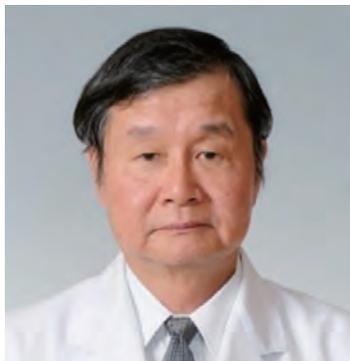
福岡大学に赴任させてもらったのは平成 10 年 4 月、その後の 21 年在職中に次第に心に感じてきたことは、本学医学部学生そして本学を卒業した医師のおおらかさ、優しさ、謙虚さである。学生には何かが足りなくて国家試験の成績がなかなか思うように上がらないが、本人たちは意識していないと思うが医師としての素晴らしい資質を間違いなく持ち合わせている。福岡大学を退職して今一番の思いは、本学医学部の学生に対する愛着と期待である。是非頑張って素晴らしい医師になり、大きな地域貢献をしてもらいたい。

最後になりましたが、福岡大学在職中に教職員、事務方そして同窓会のメンバーの方々にご厚情をいただいたことに深謝いたします。



福岡大学在任 26 年 6 か月を振り返って

福岡大学医学部 総合医学研究センター (再生・移植医学) 研究特認教授・名誉教授 安波 洋一 (特別会員)



福岡大学の在任期間は平成 4 年 10 月より平成 31 年 3 月で早いもので 26 年余になる。福岡大学へは当時の第一外科主任教授 池田靖洋先生のお招きにより助教授として赴任した。着任後は外科臨床、教育、研究に従事、池田教授に 15 年間お仕えし、平成 19 年に再生・移植医学教授 (初代)、平成 26 年に総合医学研究センター教授となり、今日の退任を迎えることとなった。外科臨床と教育については別の機会に譲り、本稿では福岡大学で行った研究、特に私自身がライフワークとして取り組んできた“膵島細胞移植の臨床応用に関する研究”について、その経緯と一緒に学んだ大学院生を紹介し、お世話になった皆様への退任の挨拶とさせていただきます。

私は昭和 49 年に九州大学を卒業後に第一外科 (西村正也教授) に入局、卒後 4 年間の外科修練後に研究を開始した。研究テーマに関して、外科修練中に恩師である故江里口健次郎先生 (愛媛県立中央病院院長、博愛会病院院長) の薫陶を受け、膵臓外科を勉強、その過程で後の恩師となる Paul E. Lacy 教授 (ワシントン大学、セントルイス) が 1974 年 Nature 誌に発表した“糖尿病の新しい治療としての膵島移植”に興味を覚え、当時の第一外科中山文夫教授にお願いし、自分の研究テーマとして選択した。しかしながら研究を開始した昭和 54 年 (1978 年) 当時、指導者は不在で膵島細胞の培養研究をおこなっていた九州大学第一内科組織培養研究室 (高木良三郎講師、後の大分大学長) で勉強させていただくこととなった。この許可をいただく前に中山教授から膵臓・膵島移植について英文総説を書いて持ってくるよ

うにとのこと指示がありその後 3 か月間、毎日図書館に通い、論文毎に文献カード (200 枚以上) を作成、それらをまとめて論文を完成させ、提出した。最初のテーマに関し、高木良三郎先生から外科医でヒト膵臓の手術材料が入手できるので“ヒト膵島細胞の培養”に関する研究をとご教示いただき、研究を開始した。ヒト膵臓組織は膵臓切除手術例数の多い大学、ならびに関連施設 (九州厚生年金病院: 現 JCHO 九州病院、市立小倉病院: 現北九州市立医療センター) にお願ひし、切除膵臓入手の可能性があれば手術室に出向き、組織が得られたならば直ちに正常部位膵臓の一部を培養液に浸漬保存し、大学に搬送、夕刻より実験を開始した。総計 50 例以上を用い、2 年後には“新しいヒト膵島内分泌細胞培養法”としてデータをまとめ最初の英文論文として完成することができた (J Lab Clin Med 1981)。丁度その頃、高木研究室から小野順子先生 (前臨床検査医学教授) が Paul E. Lacy 教授の下に留学されていた関係で、Lacy 教授から高木先生宛に大動物を用いた膵島移植の臨床開発を始めるので膵臓に興味のある外科医がいれば推薦してほしいとの要請があり、私が推薦され留学することとなった。Paul E. Lacy 教授はもともとは病理学者で膵β細胞からインスリン顆粒が分泌される際のエキソサイトーシスを発見、更には齧歯類 (マウス、ラット) 膵臓よりの膵島単離法を確立したことで有名である。その後、単離膵島の移植による糖尿病根治治療法の開発に着手、その最初の成果として膵島の経門脈的肝内移植でラット糖尿病が完治できることを見出し、1974 年 Nature 誌に発表した。偶然にも私が膵島移植の研究を始めるきっかけになった論文である。その後 Lacy 教授の研究グループはヒト膵島単離法を確立し、世界で最初に 1 型糖尿病症例に対し、臨床膵島移植を実施している。

さて、私は Lacy 研究室に 2 年半在籍し、マウスラ

ットを含めあらゆる動物種(ウシ、ブタ、イヌ、ウサギ、サルその他)からの膵島単離法開発に従事したが、留学最後の3か月間は外科臨床を学ぶべく、共同研究者の外科教授にお願いし、ワシントン大学病院(バーズホスピタル)で毎日手洗いをして外科手術につき、主に日本で経験できなかった外科手術(血管外科、腎移植など)を学んで帰国した。私の後任には母教室より寺坂礼治先生(福岡日赤病院長)を推薦し、その後飛松正則先生(鹿毛病院)、亀井隆史先生(JR九州病院副院長)、中房裕司先生(福岡日赤病院副院長)、有馬剛先生(保土ヶ谷クリニック)、本山健太郎先生(福岡日赤病院外科部長)、大友直樹先生(県立宮崎病院)がワシントン大学(セントルイス)に留学した。

帰国後には許斐康熙先生(助教授、当時)のご配慮で文部教官助手(第一外科)に採用していただき、移植研究室に在籍し臨床と研究を開始した。以後、一貫して膵島移植の臨床応用に関する研究をテーマとして、学位指導を行った。九大での学位取得者は亀井隆史先生(JR九州病院副院長、Diabetologia 1989)、笠普一朗先生(千早病院副院長、Transplantation 1991)、植木理夫先生(開業、Transplantation 1995)、中野昌彦先生(筑後市立病院外科部長、Transplantation 2000)、豊福篤志先生(小倉医療センター、Diabetes 2006)の方々である。この間、1988年10月から1992年3月まで国立小倉病院外科医長として出向し外科臨床をしながら研究を継続した。国立小倉病院在職中に当時福岡大学第一外科教授池田靖洋先生からお招きいただき1992年4月に第一外科助教授として赴任した。福岡大学では外科臨床、教育、研究に励んだ。福岡大学第一外科では五十君裕玄先輩が築かれた研究室があったが先生がご出向後には後継者がいない状況であった。福岡大学での最初の学位取得者は永井哲先生(牟田病院副院長、Pancreas 1996)で以後、大塚吉郎先生(老健施設パキス、Transplantation 1997)、廣吉元正先生(小倉医療センター外科部長、Am J Gastroenterol 1999)、

牧孝将先生(小柳記念病院、J Surg Res 2000)、池原康人先生(那覇おりぶ山病院、J Clin Invest 2000)、小玉正太先生(福岡大学再生・移植医学教授、大学院での仕事は自己免疫拒絶反応に関する研究であったが学位論文は留学中の論文を提出した、J Clin Invest 2001)、中村嘉一郎先生(開業、Transplantation 2003)、平川栄二先生(木村外科病院、Pancreas 2004)、鍋山健太郎先生(輝栄会病院、Transplantation 2004)、佐藤雅之先生(糸島医師会病院、Transplantation 2007)、新田智之先生(開業、Transplantation 2009)、松岡信秀先生(開業、J Clin Invest 2010)、伊東威先生(戸畑共立病院、Pancreas 2015)、小島大望先生(福岡大学消化器外科、Transplantation 2012)、米良利之先生(開業、Am J Transplant 2013)であった。私自身はこの間にいくつかの成果をFirst authorとして論文発表した(J Exp Med 2005, Transplantation 2018)。学会発表に関しては研究成果を特に国際学会で発表するように努めた。その結果、関連領域では最高峰の米国糖尿病学会(口頭発表:伊東2009、田中2014、中房2018)を始め、米国移植学会移植外科学会、国際移植学会、国際膵・膵島移植学会にほとんどの大学院生が口頭発表を行い、福岡大学からの国際学会発表は57回になった。このような研究は研究費なくては実施できない。今回、退任に当たり、福岡大学での学外競争的研究資金(科研費など)を集計したが総額3億円余(直接経費)となった。平成26-29年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(計1億1千万円)、平成30-32年度日本医療研究開発機構(AMED)(計6000万円)が最近獲得した大型研究費である。

学位取得者には希望すれば有給を必須条件として留学先を紹介し、以下の諸君が渡航した。亀井隆史先生(ワシントン大学外科)、笠普一朗先生(ハーバード大学)、小玉正太先生(ハーバード大学、なお笠先生と小玉先生の留学先はProf. Denise Faustmanで私の留学時に同じラボで勤務した仲で、最初に笠先生を、その後小玉先生を派遣し

た)、中野昌彦先生(ミネソタ大学外科)、永井哲先生(カルフォルニア大学ロサンゼルス校)、伊東威先生(バイラー大学)、米良利之先生(ハーバード大学)。

上記研究を続けながら、実際に福岡大学で臨床膵島移植を実施すべく、福岡大学病院内で準備を進めた。このプロジェクトには多くの方々のご支援とご協力があった。構成メンバーは小野教授(臨床検査医学)、安西講師(内科第一)、丹羽講師(輸血部)、片岡教授(薬学部)、金城コーディネーターをはじめ、検査部ならびに薬剤部の方々毎月会議を開催し、準備に努めた。そして瓦林病院長の時代、平成18年11月に九州沖縄山口で最初の膵島移植を成功裏に実施することができた。腎移植後膵島移植の症例で全国2例目、膵島移植としては14例目であった。レシピエントは1型糖尿病で腎不全に対し母親をドナーとする腎移植を受けており、移植腎が再度糖尿病性腎症に罹患するのを危惧し、ご自分で膵島移植について調べられ、福岡大学病院での移植を希望された。この移植に際しては中野先生をリーダーとし、松岡、伊東、新田諸兄が膵島単離を担当、岡崎教授、東原講師(放射線科)が血管造影室で実際の移植を行った(移植直後集合写真:福岡大学病院血管造影室にて、平成18年11月3日)。現在、このプロジェクトは小玉教授が担当している。



その後文部科学省が我が国の大学に於いて世界的研究を支援する目的で多額の研究費を投じたグローバルCOE(Center Of Excellence)プログラムを実施したが、それに習い、福岡大学は独自に特色ある研究を推進するためにグローバルFUプログラムを

企画し学内公募を行った。我々はプロジェクトチームを組織し応募、幸いにも採択された。課題名は“糖尿病の包括拠点形成による新規治療法開発”で拠点リーダーは安波が務め、メンバーは医学部(岩本教授、安西講師、廣松教授、鍋島教授、野田准教授、柳瀬教授)スポーツ科学部(田中教授)、薬学部(片岡教授)で構成し、事業推進協力者として小玉先生(ハーバード大学 Assistant Prof、当時)と谷口克先生(理研免疫アレルギー総合化学研究センター長、当時)にご参加いただいた。研究費は平成20-24年度の5年間に7500万円/年であった。この研究費により病院内に新たな臨床用膵島細胞分離施設が作られ、また他の資金も加え、田中宏暁先生のご指導下に福岡大学病院新診療棟内に運動リハビリテーション器具が整備された。またハーバード大学留学中の小玉正太先生がポジションを探されていたのでこの研究費で学長付き准教授として採用した。小玉先生はその後医学部再生・移植医学准教授として迎え、平成26年4月より教授となり、現在に至っている。

今回、執筆の機会をいただき、今までの自分の足跡を辿ってみたが、本当に多くの方々のご支援により福岡大学での26年間の在職期間を全うできたと思ひ、感慨無量である。特に膵島移植にご理解があり、“福岡大学の宝であるから頑張って進めてください”とご支援、激励くださった満留医学部長(当時)、また再生・移植医学講座の新設にご尽力いただいた岩崎医学部長(当時)、瓦林病院長(当時)、グローバルFUプログラムでお世話になった瓦林副学長(当時)、留学時より今日まで糖尿病内分泌学の恩師であり、膵島移植を共に推進いただいた小野教授(現村上華林堂病院)、更には福岡大学で勉学の機会をお与えいただいた池田靖洋教授に深甚なる謝意を表し、この稿を終えたいと思ひます。長い間、お世話になりありがとうございました。福岡大学ならびに同窓会諸子の今後のご発展を心よりお祈り申し上げます。

31年の重み

福岡大学医学部 総合医学教育センター（呼吸器内科）名誉教授 渡 辺 憲太郎（特別会員）



私は昭和63年7月に福岡大学に採用され、以後30年9ヵ月の長きにわたって福岡大学医学部・病院で勤務させていただき、平成31年3月31日をもって退職致しました。平成の始まる直前から終わりまで、まさに平成の時代を通して福岡大学で過ごしたことになります。

昭和51年春、呼吸器疾患を専門的に診ることができる医師を目指して、九州大学医学部胸部疾患研究施設（呼吸器科）の門を叩きました。医師としての仕事を九大病院呼吸器科でスタートし、医師になって12年後に福岡大学に就職しました。しかし、実際に九州大学医学部・病院呼吸器科で医師として勤務した期間はわずか3年しかありません。他の診療科で研修医として過ごした1年、病理学教室での5年、国立療養所福岡東病院での1年、米国留学の2年の合計9年を重ねた後に福岡大学に就職しました。というわけで、老境に差しかかった私のこれまでの医師人生の3/4を福岡大学で過ごしたことになります。

福岡大学医学部・病院における31年間の経験は私にとって貴重な人生の糧となりました。米国留学を終えて高揚した気分を抑えながら福岡大学で仕事を始めたのですが、各診療科の垣根が低くお互いに協力できる体制が整っていることが私にとってとても新鮮に映りました。これはいま活躍されておられる先生方にはあまりピンとこないかもしれませんが、当時の流行り言葉でいうところのセクショナリズムが大学医学部の各講座・診療科を支配していました。研究面に関しては、さすがに財政上の問題もあり、小規模な各診療科で贅沢な機器を備えることはできませんでしたが、中央管理の実験施設が整っており、少なくとも私にとって研究環境に不満はありませんでした。そ

れでも、就職して何年かがあつという間に過ぎ去り、診療・教育と研究を両立させることの難しさを徐々に感じるようになってきました。診療や教育に充てなければならない時間が多くなるにつれて、厳密に決められたタイムスケジュールに沿って行う実験がやりにくくなってきたのです。加えて、その頃は私自身の基礎研究能力の限界を感じ始めた頃でもありました。実験を止めようと決心したのが40歳台半ばだったと思います。

診療や教育の時間を邪魔することなく、自分で時間をコントロールできる研究はなにかと考えた時、思いついたのが大学院時代に学んだ病理組織学的研究です。病理組織標本さえ作っておけば、それを検鏡するのはいつでも可能です。先ずやってみようと思ったのが、これまで福岡大学病院で行われた病理解剖や外科的生検の組織標本を顕微鏡で観察し、臨床所見と対比することでした。ここで大きく立ちほだかる（はずだった）のが、病理学講座という大きな組織です。病理学講座・病理部に保存している貴重な標本を、はたして教室に在籍していない者が己の研究のためだけに見せてもらえるのだろうかという心配です。おそろおそろ許可をもらいに行ったところ、大した質問もなく、すぐに自由に使ってよいという非常にありがたい返事を頂戴しました。

その後20年以上にわたって私の地味な臨床研究の手法は変わりませんでした。分け隔てなく研究の門戸を開いて下さった病理学教室の姿勢があったからこそ、私はここまでやって来ることができました。その姿勢に深い敬意と感謝の念を捧げたいと思います。まさに福岡大学ならではの、官立大学にはない自由な雰囲気があると実感し、それを存分に味わい楽しみながら仕事を続けることができました。しかし、最近のように時代の流れとはいえ、規則でかんじがらめに縛られるようになると、古きよき時代の鷹揚さ、悪く言えばアバウトさがなくなってくることに對して一抹の寂しさを感じています。

教授退任ご挨拶

前筑紫病院 眼科 診療部長 名誉教授 向野利寛 (特別会員)



この度、3月31日付けで、29年間お世話になった福岡大学を定年退職しました。私は当時の大島眼科教授から、「筑紫病院に眼科を開設するので来ないか」とのお誘いで、1990年4月に産業医大から福岡大学に

移りました。当時の福大眼科は、外から見ていても活気があり、眼科の最先端手術である硝子体手術の先頭を走っていました。当初は福大病院に所属して、半年間大島教授のすべての手術に第1助手としてつきました。半年経った頃から、徐々に独り立ちし、1991年1月から筑紫病院に眼科を開設しました。

開設当初の眼科は4人でした。私は筑紫病院に移ってからも、しばらくは木曜日に福大病院で手術をしていました。1990年代は増殖性硝子体網膜症や増殖糖尿病症は難治性で、他の大学や病院から多くの患者さんが紹介されて来ていました。それまで治らなかった病気を治療できるのは素晴らしいことでした。特に思い出深いのは未熟児網膜症の硝子体手術です。未熟児網膜症の手術は外国を含めて他の施設ではほとんど為されておらず、その手術結果を携えてアメリカの学会へも毎年のように発表に行きました。この頃、昼は手術、夜は大学院生達と研究や飲み会と忙しくも楽しい時代でした。筑紫病院でも、患者数、手術例数も非常に増えました。筑紫地区を始め、他県からも多く患者紹介を頂きました。2002年に入り、筑紫病院眼科の医師数が減って、非常に大変な一時期もありましたが、筑紫病院眼科を確立できたと自負しています。

私が筑紫病院に移った当時、筑紫病院の初代教授は個性的な方が多く、地区の医師会との関係、また筑紫病院と医学部との間もいろいろと難しいことがありました。病院としても赤字が続き、医療担当副学長が筑紫病院診療部長会に来られて、「筑紫病院は閉鎖する。七隈に戻りたい者は戻れるようにする」と

言われた事もありました。これに対して、診療部長会で激論を交わしました。何とか黒字病院にしようと、職員数を増やさずに救急医療などを始め、一時はまるで野戦病院のようでした。それと共に病院の体制を整備して地域医療支援病院の指定にこぎつけました。病院職員全体の努力もあって、1億から3億の黒字が数年続き、新病院の建設が決定しました。その頃を思い出すと感慨ひとしおですし、病院職員の一体感が強まった時期でもありました。また、筑紫病院の教授選考方法についても医学部長と議論もしました。その後現在の病院教授決定のルールが決まったと思います。

2013年に筑紫病院は待望久しかった新しい建物に移りました。それまでは夏暑くて冬寒い病院でしたが、快適な病院に変わりました。2013年12月から筑紫病院長をすることになり、1期のつもりが、結局、3期5年4ヶ月にもなりました。病院長業務は大変です。病院長として厳しい決断をせまられることもありましたが、大学協議会では、時に病院の赤字が問題となり、他の学部から病院は決して良く思われていませんでした。そこで、福大病院長と共に他学部の先生に病院のことを理解してもらうように努めました。病院の赤字の主因が人件費であることなども徐々に知られてきたと思います。病院の黒字化のためには、病院長権限の明確化を含めた改革が必要です。大学執行部といろいろ協議してきましたが、道半ばです。今後の進展を期待しています。

この29年間、特に病院長としての5年間は医学部長はじめ、多くの先生・同窓会の方々に本当にお世話になりました。同窓会を含めて多くの先生が学生教育に尽力しておられることも知りました。その成果が出て、医師国家試験の成績が向上することを願っています。

筑紫病院は福岡大学メディカルゾーンの一員です。学生の教育にも十分に役割を果たしていますし、筑紫地区で福岡大学の地位向上にも寄与していると自負しています。福岡大学の一員として、医学部・福大病院と一緒に協力していくことが大切です。今後も筑紫病院を宜しく願います。と共に、今後の福岡大学のさらなる発展を期待しています。

教授退任に寄せて（自己を振り返って）

福岡大学筑紫病院 外科 名誉教授 前川 隆文（2 回生）



平成最後の年になる本年 3 月末日に福岡大学筑紫病院外科教授を退任いたしました。私は昭和 48 年 4 月に福岡大学医学部に二回生として入学いたしました。当時から学

年制が敷かれていましたので、入学当初 128 名いた同級生は、昭和 54 年の春に卒業した者は 68 名でした。この年の 4 月の医師国家試験（当時は春と秋の 2 回行われていた）に合格し、6 月に福岡大学医学部第二外科に入局し臨床修練を開始しました。昭和 55 年 12 月から半年間、壇麻酔科教授の許しを得て北九州市立小倉病院麻酔科で飛松麻酔科部長の薫陶を受けました。昭和 56 年 6 月に福岡大学医学部外科学第二に医員として復帰し、食道外科グループに配属されました。当時の食道外科グループは、現在では当たり前となった食道癌に対する三領域（頸部・胸部・腹部）郭清を提唱され、日本消化器外科学会で宿題報告をされた三戸康夫助教授が牽引されていましたが、昭和 57 年 1 月半ばに劇症型肝炎のため還らぬ人となりました。そしてその年の 4 月に後任として、九州大学医学部第二外科より児玉好史助教授が着任されました。この年の 9 月に白日高歩先生は助教授に昇格され呼吸器外科グループの主任、児玉好史助教授が消化器外科グループの主任という 2 大体制となりました。昭和 58 年 4 月に念願であった福岡大学大学院へ進学することとなり、外科学第二講座主任教授である犬塚貞光先生の主催されます福岡大学大学院医学研究科臨床生化学に入学

いたしました。児玉好史助教授は胃癌の研究が専門で DNA による早期胃癌の解析や胃全摘術後の免疫能の低下の研究などがあり、先生のご指導のもと私も胃癌に関する免疫学的研究に励みましたがなかなか成果が出ず、病理学第一講座の菊池昌浩主任教授にお許しを得て病理学を学ぶこととなり、ここでリンパ球に対する免疫組織学的染色法を学ぶことができました。そしてこの手法を用いて胃癌組織周囲のリンパ球の研究をおこなっておりましたが、昭和 60 年 10 月初めに指導教官の児玉好史助教授は体調不良を訴えられ闘病生活をおくられていましたが、奇しくも三戸康夫前助教授の命日の一週間後にあたる昭和 61 年 1 月 23 日逝去されました。2 回目の福岡大学医学部外科学第二教室葬が営まれ、現職の助教授が任期 3 年毎に亡くなるという奇遇に遭遇しました。昭和 61 年 4 月に神代龍之介助教授が米国、フィラデルフィアにあるハーネマン大学医学部外科助教授から消化器外科の主任として赴任されました。そして私のことを大変心配してくださった病理学第一講座の岩崎 宏教授と外科学第二講座の神代龍之介助教授のご指導で、学位論文「胃癌組織局所における T リンパ球の免疫組織学的検討」を作成し昭和 62 年 9 月に福岡大学大学院を卒業しました。昭和 62 年 10 月に福岡大学医学部外科学第二講座の助手に昇格し、昭和 63 年 4 月に医局長を命じられ新入局員を連れて江田島にある海上自衛隊幹部候補生学校（旧海軍兵学校）に一週間の体験入隊をしました。当時は本人たちも大変な経験をしたことなのでしょうが今となっては大変良い思い出で、防衛医科大学校を卒業し海上自衛隊に配属されたばかりの医師（三等海佐）（白衣にも肩章がついている）たちの訓練風景や意見交換会は今でも鮮明に甦ってきます。平成元年に米

国のハーネマン大学医学部外科主任教授の松本輝夫先生を招いて、成犬をもちいて腹腔鏡下胆嚢摘出術の実験実技を福岡大学医学部アニマルセンターにて行ない、その翌年に福岡大学病院では初の（後の調査で日本でも初とのこと）腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行し成功しました。平成3年5月から平成4年4月までの1年間に米国フィラデルフィアのハーネマン大学医学部外科に留学し、Laser SurgeryでFemo-Femo Bypass, Femoropopriteal BypassのPatency rate向上の研究に従事しながら、臨床ではLaparoscopic Cholecystectomyに従事できたのは幸運でした。平成4年5月に帰国し福岡大学病院救急救命センターに配属され、当時の後藤助教授と救急医療に従事し急性腹症を任せていただきました。平成4年10月に福岡大学病院外科第二の講師に昇格し、主に食道外科、大腸直腸外科に従事させていただき、この時の臨床研究で「イレウスを伴う大腸癌に対する一期的切除・吻合法」や「肛門挙上器とヘルニアステープラーを用いた超低位直腸前方切除術」は人工肛門を作らない手術として患者さん重宝されました。平成5年3月31日付けで犬塚貞光初代主任教授が退官され平成5年6月1日付けで産業医科大学から白日高歩教授が福岡大学医学部第二外科の第二代主任教授として赴任されました。そして平成6年6月には久留米大学医学部第一外科から山下裕一助教授が消化器外科疾患の主任として赴任され、同10月には長崎大学医学部第一外科から川原克信助教授が胸部外科疾患の主任として赴任され再び二大疾患体制となりました。平成16年9月に福岡大学病院にもNSTチームが結成され、私はその総括責任者としてNST室長を命じられました。当初は手探り状態でしたが、徐々に成果を表し一年後には「福岡大学病院におけるNSTの現況と成果」を公表できました。この頃より教室は着々と生体肝臓移植の準備を開始し、平成18年6月に山下准教授と乗富講師を中心とする肝臓移植チームは福岡大学

病院としては初の生体肝臓部分移植術に成功し、私もdonatorチームとして東京大学肝臓移植外科の幕内教授の執刀手術に助手として参加させていただいたことを誇りに思っています。そして平成18年度より大学改革が進められ臓器別再編が行われた結果、我々外科学の分野は福岡大学医学部外科学講座消化器外科、外科学講座呼吸器、乳腺内分泌、小児外科それと外科学講座心臓血管外科の3部門に編成され、平成18年10月1日付けで山下裕一教授が福岡大学医学部外科学講座消化器外科学の主任教授に就任されました。私の身分も福岡大学病院外科学講座消化器外科講師となりました。そして翌年に福岡大学筑紫病院外科の有馬教授の後任教授選挙が公示され、幸運にも教授に選出された私は、平成19年10月1日付けで福岡大学筑紫病院外科の第二代教授として赴任いたしました。着任時の目標は福岡大学筑紫病院外科に内視鏡外科を作ること、臓器別疾患チーフを作ること、筑紫外科独自の研修医を入局させることでした。一朝一夕には達成できませんでしたが、徐々に医局員に浸透し臓器別疾患チーフは置けませんでした、ここ10年でなんとか3分の2は達成できたのではないかと思います。

福岡大学筑紫病院外科教授を退任するにあたり自己の過去を振り返り、自分が歩んできた道を辿ると自分一人では何も成すことができず、その都度に多くの恩師や先輩、そして同輩や後輩達に助けられてきた自分がいたことに気付かされます。ここに改めてご教示いただいた先生方、ご協力いただいた先生方に感謝申し上げます。私は40年お世話になった福岡大学を去ますが、今度は学外から福岡大学を応援したいと思います。大変お世話になりました。

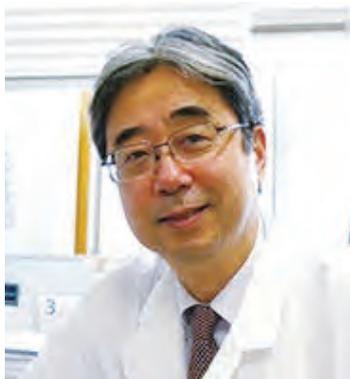
最後になりましたが、福岡大学筑紫病院外科で私と苦楽を共にし、外科を盛り立ててくれた医局員の皆さんに感謝申し上げます。筆を置きたいと思います。

有難うございました。

現在：医療法人社団高邦会福岡中央病院副院長

医師生活の極意

福岡大学医学部 内分泌・糖尿病内科学 教授 柳 瀬 敏 彦 (特別会員)



・診療、教育、会議、雑務で目の回るような忙しさが続くと、やがて、バーンアウトしてしまうかもしれない、と弱気になる。でも、そんな日々にも「研究」の遊び心が、少し加わるだけ

で、何だか気持が前向きになれる。魔法だ。

・出張は、疲れる反面、捨てたものでもない。単なるdead time だと思っていた時期もあったが、多忙になるにつれ、大切な時間となっている。飛行機や新幹線の中でぼーっとしている間に普段はけして考えつかないような妙案が生まれてくるから不思議だ。研究のアイデアや人事は、実は、このぼーっとした時間に考えたことが多い。

・退屈な会議を少しでも楽しくする方法を一つだけ知っている。心の中で、出席者の発言を英語にtranslateしている。即興の英会話トレーニングになるだけでなく、実は会議内容にも集中することにもなる。私が教えたことは内密に…。

・患者さん向けの生活習慣病の講演は、自己矛盾で面はゆい。医局のお菓子を目の前にすると…、とりあえず、自分のことは棚に上げるしかない。喫煙ドクターの禁煙指導よりはましか…。

・前回外来診療録のチラ見、この効果は絶大である。会話がスムーズとなり、患者さんは「自分のことを気にかけてくれている」あるいは、「えらく記憶力のいい先生」と勘違いしていただける。急がば回れ、とにかく「呼び込む前のワンクリック」である。

・教務委員になって改めて思うのは「教育力がなければ、医師としては半人前」ということ。学生は、忙しい

臨床の合間に、熱心に教育してくれる医師には、思いの外、感謝と敬意を抱いている。教えることで、自分の弱点も知る。教育力のある医師の周りには、必ず良き後輩医師が集う。これは、医学部、病院、医局繁栄の法則と言っていい。

・何をやり遂げたとしても、多少の反省と後悔はする。ただ、迷った末、やらなかった時の後悔は、もっと大きいことが多い。慎重さは必要だが、若いうちは、「迷ったらGo」くらいでちょうどよいのかもしれない。me?、最近、「迷ったらback」が増えた。(平成27年9月某日記)

PS：2019年3月31日をもって福岡大学医学部内分泌糖尿病内科を定年退職いたしました。私が在職中に年報の中で医局員向けに書いていた上記散文を紹介することで、退任の挨拶とさせていただきます。種々の煩惱をかかえながら働いていた在職当時の様子を少しでも知っていただけるかと思えます。教授職の任期が、ちょうど10年でしたので、スタートからゴールまでひたすら全力疾走の末、力を余すことなく100mを走り切った感覚です。その意味では、悔いのない充実した教授生活でした。在職中の皆様のご厚情に心より感謝申し上げます。4月からは誠和会牟田病院で院長として勤務させていただいています。医学部の益々のご発展を祈念いたします。



教授退任挨拶

福岡大学医学部 麻酔科学講座 教授 山 浦 健 (特別会員)



この度、平成31年3月31日付をもちまして、麻酔科学講座教授を退任いたしました。

2014年(平成26年)に第3代の麻酔科学教授として赴任させていただきました。

福岡大学には私が福岡大学附属大濠高校の卒業生ということもあり、温かく迎えて頂きました。この度、道半ばで退任することになり申し訳なく思っております。福岡大学で過ごした5年間はあっという間でしたが、教室員はじめ皆様と充実した時を共有できた至福の期間でした。

この間、皆様のご支援のお陰でいろいろなことをさせていただきました。

まずは教育が充実している施設に人は集まるとの信念で、教育スタッフの充実を目標に大学院進学、国内および海外留学の推進を行いました。福岡市立こども病院、鹿児島大学、米国オレゴン健康科学大学の基礎部門、ドイツのエッセン大学の心臓麻酔部門に派遣することができました。立派な臨床医になるには臨床研究の他、症例報告を書く力を身に付けてほしいとの思いで、なるべく多くの教室員に学会発表と論文作成の機会を作ってきました。お陰様で日本麻酔科学会では毎年優秀演題に選ばれ、論文数も増え、就任当時は最下位の医学部の業績評価も、少し順位を上げることができました。

学生教育では、麻酔科学は座学では難しい面があるため、臨床実習に力を入れました。常に教員が一

丸となって熱心に臨床実習指導をした結果、今年の謝恩会では優秀実習診療科賞の第3位の高評価を頂くことができました。忙しい臨床の中でも教室員が熱心に指導する雰囲気を作れたことが何よりだったかと思います。

臨床では、高度で安全な手術医療を目指し、周術期管理センターの設立、手術予定編成会議、セントラルモニター、緊急コール制度、電子麻酔・重症患者記録の導入なども含めて手術部の改革を、また、外科系集中治療室では専門医資格および施設認定取得など内容も充実しました。これらにより質の高い効率的な手術医療に寄与できたと思っています。

麻酔科は女性医師が多いということで保育所新設にも関わらせていただきました。認可保育園以上の施設と教育内容の充実を掲げ、男女とも安心して子育てと仕事ができる環境が整ったものと思っております。

お陰様で、医局員も増加し、大学勤務の麻酔科医だけでも40名と九州地区ではトップクラスの人員を確保し、安定して定例手術の他にも緊急手術にも対応できるようになりました。

これから、専門医取得者および指導者が充実してくる時期に交代することになり、心残りではありますが、教室員が大きく羽ばたく姿を少し離れたところから応援したいと思っております。

これまで、私を支えてくれた教室員の皆様、福岡大学の皆様、医学部の皆様、病院の皆様、同窓会の皆様に感謝申し上げます。福岡大学医学部・福岡大学病院の益々のご発展を祈念しております。本当にありがとうございました。

現所属：九州大学大学院 医学研究院 外科学講座 麻酔・蘇生学分野

2020年度 福岡大学医学部同窓会 研究奨励賞 募集要項

対 象：正会員及び準会員で、40才未満の者または学部卒業後10年未満の者
(本会会費完納を条件とする)

研究課題：医学に関するものであれば自由(医学に関する研究論文又は研究計画)

申請方法：所定の申請書による(所定欄に支部長推薦を要す)

提出先：〒814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1 福岡大学医学部同窓会事務局
TEL 092-865-6353(直通) 代表 092-801-1011 内線 3032
FAX 092-865-9484

締 切：2020年5月1日(金)

賞状・賞金：奨励賞(優秀論文賞を含む)5件以内

発表及び表彰：2020年7月、第39回同窓会総会席上 必ず出席すること

その他：①論文受賞者は抄録を提出すること

計画受賞者は1年後研究成果報告書を提出すること

②申請書は同窓会ホームページからダウンロードするか、同窓会事務局に請求のこと

③申請書はワープロで記載し、過去の研究業績(原著、著書、症例報告、学会発表)、
研究の独創性・重要性を十分に書くこと

※準会員の方もお応募下さい。

福岡大学医学部同窓会 在外研修援助金 募集要項

①長期研修

対 象：正会員、準会員(本会会費完納を条件とする)で医学の研究または医療技術の習得のため、
3ヶ月以上外国に留学する者

申請方法：所定の申請書により留学出発3ヶ月前までに提出のこと

提出先：〒814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1 福岡大学医学部同窓会事務局
TEL 092-865-6353(直通) 代表 092-801-1011 内線 3032
FAX 092-865-9484

援助金：1件20万円を限度とし、年間5件以内

発表：本人に文書にて連絡

その他：①受給者は帰国後その成果を同窓会会報に発表すること

②研修中に生じた問題について同窓会は関与しない

③申請書は同窓会事務局に請求又は烏帽子会ホームページからダウンロードのこと

なお、在外研修援助金をうけ留学している者は、出来る限り学生会員海外研修助成事業に賛同し、渡航研修する受け入れ側施設担当者として、協力する事が望ましい。

在外研修報告

海外留学報告

福岡大学医学部 心臓血管内科学・臨床検査医学 後藤 昌希 (33 回生)

この度、福岡大学医学部同窓会 烏帽子会より助成をいただき、2017 年 10 月から 2018 年 9 月までの 1 年間、アメリカ・南カリフォルニアにあります University of California, Irvine (UCI) へ留学させていただきました。

UCI では、Nephrology & Hypertention に所属し、ボスであります Dr. Nosratola D. Vaziri と Dr. Hamid Moradi のもと基礎研究・臨床研究を行なってもらいました。研究内容として、まず前任の末松保憲先生の研究を引き継ぐ形で、慢性腎臓病モデルラットを用いた心臓の解析や維持透析患者の血清を用いたコレステロール関連の解析をしておりました。さらに Dr. Moradi との新たな試みとして、慢性腎臓病モデルラットを用いた endocannabinoid の研究を開始しました。この研究では、endocannabinoid である 2-AG 研究の第一人者である Dr. Piomelli のラボで endocannabinoid について学びながら、Vaziri ラボでプロジェクトリーダーとして、研究のマネージメントをさせていただきました。Vaziri ラボだけでは完結しないことも多々あり、他のラボに向いてサポートを

もらいながら必死に研究を進めていけたのはいい思い出です。この研究に関しましては、帰国後も UCI とコラボレーションしながら、研究を形にしたいと思っております。

さて、私生活はと言いますと、自分が住んでいたカリフォルニア州アーバインは、温暖でほとんど雨が降らず、近くには有名なビーチが多くあり、観光客も多く訪れるリゾート地の様な場所です。また、全米でも教育水準が高く、富裕層が多く居住しており、治安が良いことで有名です。そのため日本の企業も多く進出しており、日系スーパーも多くとても住みやすい街でした。さらにアナハイムから車で 20 分程度のところであり、ロサンゼルスエンジェルスの大谷翔平選手一色であったのは言うまでもありません。今回、アメリカという異国の地で生活してみて、様々な人種がそれぞれを尊重し合い、協調して暮らすアメリカの懐の深さには感銘を受けました。また子供や高齢者、障害者に優しい国で、外国人であり子連れでもあった我々には想像以上に生活しやすかったです。そして何よりも家族を大切にするという点では、多く学ぶことがあ



Vaziri ラボのメンバー

手前左が Dr. Vaziri、右が Dr. Moradi。
アメリカ人、イラン人、ブラジル人、中国人、韓国人が所属しており国際色豊かなラボであった。



Dr. Moradi と

普段は腎臓内科医として、UCI メインキャンパスから車で 20 分ほど離れた UCI メディカルセンターに勤務されていた。

り、様々な困難があったにも関わらず、文句ひとつ言わず、共に乗り越えてくれた家族には感謝の気持ちでいっぱいです。

留学を通じて、このような貴重な体験ができたのも、福岡大学医学部長 朔啓二郎教授、心臓血管内科学 三浦伸一郎教授、臨床検査医学 松永彰教授、前

任の末松保憲先生をはじめ、烏帽子会の先生方のご尽力あってのことだと思っております。この場を借りて感謝申し上げます。今後、少しでも福岡大学に貢献できる様、精進してまいりますので、変わらぬご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



UCI キャンパス

3万人が在籍しており、敷地面積は6km²ほど。キャンパス内は緑が多く、建物は南国を感じさせるであった。



ラグナビーチのサンセット

西海岸はどのビーチもサンセットが美しく、パームツリーとのセットが絵になる。

Khon Kaen 大学で行われた 4th ICEM を経験して

福岡大学医学部 岡本峻和 (M6)

福岡大学医学部 金子峻 (M6)

2019年3月29日から4月2日までタイのコンケン大学で行われました ICEM (international challenge of emergency medicine and related basic science) という救命救急医学に関する医学生の国際大会に6年生4名、5年生4名(2019年4月現在)の2チーム計8名で参加させていただきました。

今回福岡大学としては2回目の参加であり、去年より継続し、この大会を通して世界各国の医大生との交流を行わせていただいております。準備に関しては今年は Tintinalli's Emergency Medicine を主体とし座学の学習を行いました。実技に関しては消化器内科 / 医学教育推進講座の田中先生にご協力いただき腹部超音波検査の練習を、去年から引き続き解剖学教室のフェリル先生にご協力いただいて救命

医学に関する医学英語の練習を、また BLS, ICLS, ACLS に準じた心肺蘇生に関して星野先生をはじめとした救命救急医学講座の先生方にご協力いただき、救急センターのシミュレーターをお貸しいただき練習させていただきました。また、5年生はクリニカルクラークシップで救命救急をローテートする前でしたので、数日間救命救急センターにて夜間当直を経験させていただきました。

1日目の Opening Ceremony では福岡大学のチーム関係なく他大学の医学生とグループになってそれぞれの国の情報交換をし、交流を深めました。日本からは和歌山大学、筑波大学、福岡大学が参加しており、日本の各大学との交流も深めることができました。本大会には今回タイ、ドイツ、南アフリカ、日

本、インドネシア、フィリピン、中国、ベトナム、カンボジア、インドネシア、スペインなどから学生が 29 チーム参加しておりアドバイザーを含めると大会参加者だけで 120 名以上の規模の大会であり、使用される言語は全て英語でした。普段日本にいる際には英語を

使う機会は滅多にありませんが、会話をする際は全て英語を用いなければならず、初めは苦戦していたものの、最終的にはコミュニケーションをとってそれぞれの国の文化を感じることができました。



2 日目には qualifying round (予選) が行われました。去年とは異なり、60 問の MCQ と、大学毎のチームで症例問題を解くグループ形式の試験が行われました。

MCQ については去年よりは国家試験の一般問題に近い問題が取り扱われており、英語さえ読めれば解答可能な問題も多くなったような印象を受けました。推薦された問題集からの出題も数問ありましたが、それでもやはりかなり臨床的な問題もあり、脳梗塞後のシバリングの適応条件を聞く問題や、子宮外妊娠でバイタルが崩れている症例への対応などは特に臨床力不足を思い知らされました。和歌山や筑波も近いところで迷ったものも多かったようで、日本の医学生にはさらに臨床的な研鑽が必要であること、また日本との環境の違いによって疾患頻度が大きく変わることを、必要とする能力も少し異なるということを学びました。

またチームで取り組んだケースシナリオの問題に関しては、小児の誤嚥の症例や胎嚢の確認出来ない hCG 高値の女性の症例、アセトアミノフェン中毒の症例などが出てきて何と診断し何をオーダーする

か、何が合併症として考えられ何に気をつけなければならないか、そのあとの投薬や方針は何か等を英語で記述する問題を解くことになりました。時間がかなり短く、英語の速読が必要でした。内容としては誤嚥に対して経過観察をするか、内視鏡的に取りに行くかを判断させる問題や中毒に対して Rumack-Matthew Nomogram を読むことを求められる問題が出てきたり、子宮外妊娠に対して腹腔鏡下手術と MTX の投薬のどちらかを選択する問題が出てきたりしており、日本の学生にとっては英語で記載するには難易度が少し高かったように思います。日本語なら解けたと感じたところも多くなりかなりもどかしく感じました。

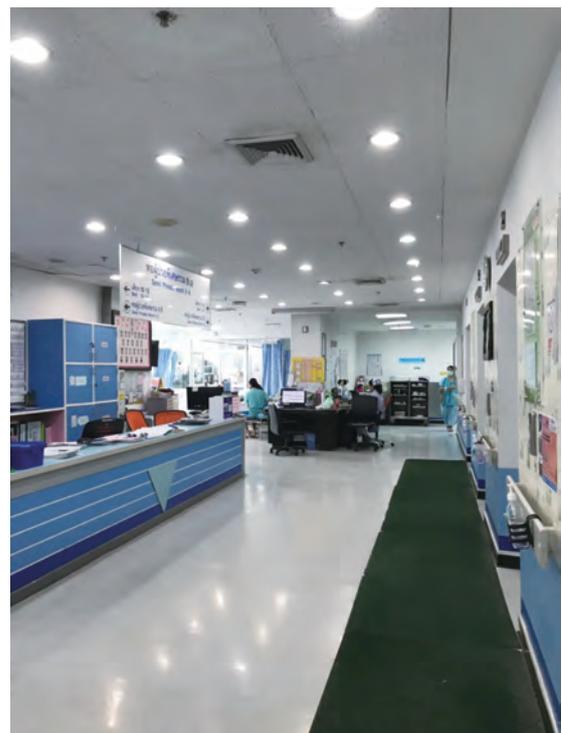
3 日目の Medical Tour では初日に交流した多国籍グループでそれぞれのブースに分かれて経口エアウェイの選択、気管挿管、気管挿管の難易度の事前判定 Mallampati 分類について、バイク事故の際に搬送でどのように固定を行うか、腹部超音波検査などを英語で現地の先生や医学生スタッフに説明して模型で実践させていただきました。6 年生は救命救急センターや麻酔科のローテーションで学習済みなので医学英語の勉強や復習になりましたし、5 年生は記憶に残る実習だったのではないかと思います。回っている際に器具が自国より古い等、他の国の学生と話す機会が多くあったのでこういった設備で普段学習しているか等を聞く機会がありました。シミュレーターがないところもあったり、週一回大学のスキルラボで練習している大学もあったりして日本との環境の違いや、日本の学生との医療に対する考え方の差を感じました。実習の内容を聞いていても、実際に週何度か働いている学生もいて、発展途上と呼ばれる国で経験できて先進国では逆に出来ないことも存在するということを感じるきっかけとなりました。また、この Medical tour で去年福岡大学に留学に来ていた学生とも会うことができました。





そしてコンケン大学の付属病院である srinagarind hospital の救急救命センターに依頼し、ICEM の大会プログラムとは別の特別プログラムを組ませていただき、救命センターのセンター長の先生と総合診療部の鍋島先生にご紹介いただいた家庭医の先生と共に、ER や各科病棟の見学をさせていただきました。食道静脈瘤破裂の治療や中毒に対して活性炭による治療を見学させていただきました。病院の環境は日本とかなり異なっていて、一定額以上の医療費は寄付で賄われていたり、見えにくいところに性被害者のための病室があったり、結核専門の部署があったり、僧侶だけの病棟があったりと社会

的、文化的背景が色濃く出ていて印象的でした。外傷の症例もかなり多いらしく、日本の症例の3倍の頻度になる場合もあるそうです。今回見学させていただいたのは昼であったため、そこまで忙しい雰囲気はなかったのですが、夜間はかなり忙しいらしく、トリアージがかなり重要となってくるようでした。日本とは一般的な家庭医学教育の違いがあることが理由のようで、実際に一般向けのポスターが病院にたくさん貼ってあるのを見せていただきました。日本の医療とタイの医療ではかなりの相違点があることに気付かせていただけるいい機会でした。



4日目は semi-final と final round が行われました。残念ながらいまだに日本の大学チームは 1st round を勝ち上がっていません。そのため今回も見学になってしまいましたが、各国の大学の学生の知識力、臨床対応力などを見ることができました。今回コンケン大学まで引率で来てくださった救命救急医

学講座の星野先生と見学させていただき、出題された問題のレベルがかなり高いのにも関わらず解いていく学生を目の当たりにし、学生たちの努力に全員が刺激を受けました。私たちを含めて、この先福岡大学の学生は semi-final や final round に進出する学生のように、世界で通用するような努力をしていかなければならないと痛感しました。



ここで参加したメンバーの感想を一部にはなりますが、掲載させていただこうと思います。

- ・各国の研修事情をきいたときに、何科でも望む科にすすめるのは当たり前ではないことに気付いた。
- ・思ってることを英語を自由に使って話して友達になっていけないのがとても悔しい。
- ・日本代表でもレベルの違いを感じて、もっと英語できるようにならなきゃいけないと思った。
- ・言葉なんてなくても人は仲良くなれる、って実感できた。S
- ・それぞれ異なる価値観をもつ多くの人たちが一つになって楽しめることには大きな意義があると思うし、このような国際交流は見習っていかなければならないと感じた。
- ・知識のみならず手技をたくさんさせてもらい、バイク事故の際の救命措置、気管挿管、エコーなど実践的な体験ができて良かった。気道確認の LEMONS など日本では馴染みのないものもあり、

勉強になった。

- ・エコーのときにどこがどうおかしいか?とか聞かれても積極的に答えて行けて、1年前よりも習ったことが多くなってあのときより成長できてるなと思って安心した。
- ・海外では週に一回エコーを当てる実習があるようで、日本よりもより実践的なことをしているのだと感じた。その一方で知識的にはそこまでの差はあまりないのではないかと実習を通して感じる事ができた。日本はもっと実技に力を注ぐべきであるし、医学生は積極的に実習に取り組むべきだと思った。
- ・英語で説明聞くのがとても大変で、みんなは当たり前のように理解していたので、英語力のなさを目の当たりにした。また、みんないつもの福大でのBSLのときと違って、積極的に手技とかをやりたいやりたいと言っていて、熱意も日本人よりも全然あるな、と感じた。
- ・講義では、疑問点があれば途中でも遠慮なく質問

するのが当たり前だった。手をあげるよりも先に声をあげていた。

- ・救命センターの教授が直々に病院を案内して下さったので、日本では中々ないことだと感じました。これは福岡大学がこれまでコンケン大学と作ってきた繋がりのおかげであり、私たちは朔先生はじめ様々な方に感謝しなければいけないと思いました。また、その感謝は私たちが今回の体験を日本で伝え、活かしていくことで恩返ししていきたいと思いました。
- ・患者をトリアージしたりカルテをつけたり、診察をしたり、というのは医学生4,5年生もやると聞いて、向こうはかなり実践的な2,3年間を過ごすんだなと思った。
- ・個人的に一番印象に残ったことは、医学生が朝一番にきて患者の問診をとりカルテを書いているということである。日本では問診をすることはあってもカルテを記載することはほとんどない。海外の医学生は病院で働くチームの一員として頑張らなければいけないと意識があるからこそ、医学を学ぶことへのモチベーションが高いのではないかと感じた。
- ・日本は日本語で医学を勉強している時点でかなりのビハインドがある。また、問題を日本語で仮に翻訳されていたとしても解けない問題が多く、世界とのレベルの差を痛感した。日本は先人達のおかげで現在 Japan ブランドがあるが、今後は国際競争力で負けていくのではないかという危機感を覚えた。
- ・日本語で訳をしてあったとしても解けるかどうかかわからかいものが多数あり、自分はまだまだであると感ずることができた。Semi-final のステージに来年立ってみたいと思えるほど、とても刺激を受ける会だったと思う。自分が思っていることを素直に言葉として伝えることは日本人が見習っていくべき姿勢だと感じた。
- ・私の参加する意義としては、日本を含め各国の同世代医学生たちはどんな人なのか、どのレベルなのか、大会プログラムの時間・遊ぶ時間・夜の自由時間など普段どのような態度で過ごしているかを見て、話して、触れて自分がこれからどうしていく

かを考える所にあつたので、レベルの違いは受け止めればいいのかと思ひ、自分は日本で提供される教育ともしっかりと学びたいと思って学び、わからないことを先生に聞いて教えてもらったりすることで充実した医学知識やスキル、医師としてのあり方を身に付けることができればよいなと思った。

- ・母国語ではない英語を使って問題に対する異議申し立てを行なっていけるというのも実力だと思った。海外の学会などで今後発表できる機会があれば自分もそのようなことに挑戦していきたい。
- ・もう少しだった。まだまだ福大生にはできることがある。そう思えるような大会だった。この無念さ、悔しさを忘れず日本に持ち帰って日本でできることをやっていきたい。

最後になりますが、今回の大会参加を実現させてくださいました朔医学部長、ICEM に関しての相談に乗ってくださった安元教授、現地でのサポート体制を作ってくださいました鍋島教授、本大会に参加させていただくにあたり5年生の実習をサポートしていただいた井上教授、長谷川教授、川崎教授、坂田教授、コンケン大学まで同行しメンバーを支えてくださった星野先生、医学英語やメンバーの結束力を高めてくださったフェリル先生、貴重な時間を割いて実技でのサポートをくださった田中先生、去年より ICEM 参加メンバーのサポートをくださっている八尋先生、高木会長をはじめとして在外研修援助金による大会参加へのご支援をいただいた烏帽子会の先生方、そして本大会に関わってくださいました全ての方々へ心より感謝を申し上げます。

今回数多く診療科、数多くの先生方にご協力いただいたことによって大会を実りあるものにする事ができたと感じております。この大会を通して得られた経験から、8人それぞれが多岐のことを学び、刺激を受けることができました。

今回学んだものを胸に、より良い医師になれるよう日々研鑽を積んでいきたいと思ひます。ありがとうございました。







姓 名	年度	回・学年	勤務先	地位役職	予定期間	留学先	支給額
高橋 宏 幸	30	準会員	福岡大学医学部 再生・移植医学	福大大学生	19.04.01 ～ 21.03	Immunobiology Laboratory, Massachusetts General Hospital and Harvard Medical School (13th Street, Charlestown, Massachusetts02129, USA)	20 万円
代表 岡本峻和	30	当時 M5	福岡大学医学部 医学科	学 生	19.03.29 ～ 19.04.02	コンケン大学 ICEM (International Challenge on Emergency Medicine) へ 福岡大学代表として 2 チーム 8 名参加	40 万円

学会開催報告

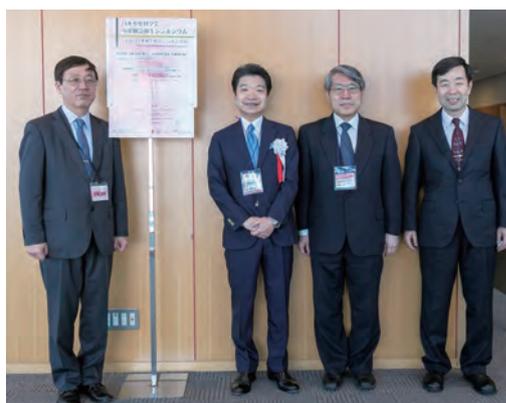
第121回日本小児科学会学術集会報告

福岡大学医学部 小児科学 教授 廣瀬 伸一 (3回生)

去る4月20日(金)～22日(日)の3日間、「第121回日本小児科学会学術集会」を福岡国際会議場で開催させていただきました。福岡大学小児科で小児科学会学術集会をお世話するのは元より、福岡大学医学部にとっても、その45年の歴史でメジャーな科目の基幹学会の総会を開催するのが初めてのことでした。しかしながら、記録的な多数の演題が集まり、大変多くの方にご参加いただき、成功裏に終ることができました。

学会のテーマは福岡大学小児科のクレド(信条)である、「その子どもの幸せのために。」とし、福大小

科を密かにアピールしました。このテーマの基、単に小児医学の最先端の診断技術や治療を論じるばかりでなく、日の当たらない社会の一隅にたたく子どもたちにも小児科医は目を向けようという意味も込め、社会的、経済的に苦しむ子どもたちの幸せのために、虐待や貧困などについても多くのセッションを割きました。更に、福岡はアジアに開かれたゲートであることから、また、一昨年私が国際小児科学会の執行理事に選出されたこともあり、国際セッションにも力をいれました。このように、今回の集会は、今後の日本小児科学会学術集会の方向性を示したのではないかと



と自負しています。

特別講演として、九州大学大学院農学研究院生命機能科学部門石野良純先生に、ノーベル賞間近と言われる CRISPR/Cas9 の最先端のお話をいただきました。対照的に、ムツゴロウこと畑正憲先生には、大変、温かくて、感動的な特別講演をしていただきました。自らの、会頭講演では旧来のスタイルを打破すべく、自分の業績を語るのではなく、今後の小児科医の果たす役割を説きました。演題からは気がつ

かなかったのですが、会場は笑いに包まれ、大いに涌いたと後で聞き、一人悦に入りました。懇親会も福大応援団、チアリーディング部、軽音部と福岡大学一色で、皆様に非常に楽しんでいただけたと思っております。最終的に、一般演題は過去最高の 1200 題、参加者の合計も 6,595 名に達し、大盛会となりました。今回の学術集會に当たり、物心両面で応援して下さいました鳥帽子会の皆様に篤くお礼を申し上げます。

第 11 回日本蘇生科学シンポジウム開催の報告

福岡大学医学部 小児科学 教授 廣瀬 伸 一 (3 回生)

去る 4 月 19 日(木)に第 11 回日本蘇生科学シンポジウムを、第 121 回日本小児科学会学術集會に併せて、福岡国際会議場で開催いたしました。これは、かねてより、小児医療に携わる者が日本蘇生科学シンポジウムを主催しよう、という声が絶えず上がっていたことによります。しかしながら、過去 10 年間は実現せず、今回やっと日本小児科学会がホストとなり開催にこぎつけたという経緯があり、会長として大変誇らしく思いました。蓋を開けてみると、参加者は 250 名(小児科学会学術集會参加登録者：158 名、蘇生科学シンポジウムのみ参加：92 名)にのぼり、一

般演題は 19 題と、いずれもこの 10 年のなかで最多を記録しまして大盛会となりました。参加して下さった方はもとより関係者の皆様に感謝いたしております。

特別講演では、日本小児科学会前会長の五十嵐隆先生が、少子化社会となった我が国における小児の蘇生科学、蘇生教育の重要性を訴えました。3 つ設けられたシンポジウムでは、蘇生後の長期予後、学校における蘇生教育さらに、小児の心停止の原因究明と予防について講演、討論が実施されました。日本蘇生科学シンポジウムの生みの親ともいふべき



岡田和夫先生(日本蘇生協議会:JRC 名誉会長)の名前を冠した JRC Okada Award (最優秀演題賞)は、松永綾子先生(千葉県こども病院)の「乳幼児突然死や ALTE における原因検索ネットワークの構築—法医学教室との連携—」に贈られました。

今回は小児の蘇生を中心に据えたプログラムであったにもかかわらず、小児医療者以外の参加者も多く、朝一番のシンポジウムからランチョンセミナー、特別講演を経て午後の一般演題、最後のシンポジウム

まで、ほとんどの参加者が全部のセッションに出席して、熱い討論を行っていました。主催者として大変嬉しいと思いました。満を持して日本小児科学会が開催した今回のシンポジウムが、我が国の蘇生科学の発展に寄与し、一人でも多くの子どもの命が救われ、家族の喜びにつながることを祈っています。末筆ながら、物心ともに応援いただいた烏帽子会の皆様に篤く御礼申しあげます。

「第1回 禁煙推進学術ネットワーク学術会議」および 「第1回 市民で地域禁煙を推進する会(公開講座)」 合同学術集会

福岡大学 医学部長 朔 啓二郎 (1 回生)

喫煙は予防できる死亡原因の一つであり、多様な臓器の癌との因果関係が報告されています。虚血性脳卒中やくも膜下出血、冠動脈疾患、心房細動、糖尿病などの発症リスクが高くなることも周知の事実です。さらに、血清脂質代謝に作用し動脈硬化惹起性に働き、交感神経系を刺激し血圧の上昇および心拍数を増加させ、血液凝固系にも悪影響をもたらします。2016年度、我国での喫煙率は18.3% (男性30.2%、女性8.2%)とかなり低下してきましたが、先進諸国と比較するとまだまだ高いのです。喫煙人口1,900万人、喫煙による超過死亡数が年間約13万人、受動喫煙によるそれは年間15,000人と推計されています。一般社団法人「禁煙推進学術ネットワーク」は、日本内科学会、日本循環器学会、日本肺癌学会などの28の学会の代表からなる禁煙啓発のための学術団体です。その第1回の学術集会と公開講座を、平成30年10月27日、福岡大学病院多目的ホールとメディカルホールで開催させていただきました。烏帽子会の皆様のご後援をいただき、大変感謝しております。本ネットワークは、2020年オリ

ピックの成功に向けて、日本医師会、日本医学会とともに、東京都受動喫煙防止条例制定の要望書を東京都知事及び安部内閣総理大臣、関連4大臣に提出してきました。2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の成功に向けて屋内完全禁煙とする包括的受動喫煙防止法・条例制定の要望書も提出してきました。オリ・パラ競技大会は東京だけの問題ではなく、日本全域がその競技場や練習場になるため、先進国としての見識が問われます。従って、本学術集会は、社会禁煙を推進する目的で開催しました。これまでの研究成果を踏まえ喫煙の健康被害を様々な視点から学術的に検証し、市民にも公開して、生命の大切さを追求する学術集会になったと考えます。公開講座には、サッカー解説者・スポーツキャスターの永島昭浩氏に、「J-リーガーの健康管理:サッカーと禁煙」というタイトルで講演していただきましたが、たくさんの中・高校生のサッカー少年も参加していただき盛会でした。皆様のご寄付に深謝いたします。

第1回 禁煙推進学術ネットワーク学術集会



第4回日本心臓リハビリテーション学会九州支部 地方会開催報告

第4回日本心臓リハビリテーション学会九州支部地方会

福岡大学医学部 心臓・血管内科学 教授 三浦伸一郎 (11回生)

2018年10月28日(日)、福岡市電気未来ホール共創館において、第4回日本心臓リハビリテーション学会九州支部地方会を開催させていただきました。近年、心臓リハビリテーションは、心血管病の非薬物療法として循環器分野で最も注目されている分野の一つです。今回のテーマは、「心臓リハビリテーションの多機能性を科学する」とし、科学的に「エビデンス」のある心臓リハビリテーションの普及によって、さらに、心血管病の発症・進展予防に役立たせることを目的と致しました。医師のみならず、看護師、薬剤師、理学療法士、管理栄養士、健康運動指導士といった多職種の医療スタッフが約450名と多くの方にご参加いただきました。特別講演には、東京大学大学院医学系研究科循環器内科学教授の小室一成先生をお迎えし、「心不全予防としての心臓リハビリテーションの重要性」に関して、教育講演も2講演、順天堂大学保健医療学部開設準備室教授高橋哲也先生より「高齢心疾患患者に対する心臓リハビリテーション」、

久留米大学医療センター循環器内科教授甲斐久史先生より「心臓リハビリテーションで知っておきたい最新の高血圧管理の考え方」について貴重な講演を賜りました。一般演題の発表数は79演題であり、福岡大学病院や福岡大学西新病院からも19の演題を報告することができました。その中で、福岡大学病院循環器内科の今泉朝樹助手が優秀演題賞、福岡大学病院ハートセンターの合谷裕子看護師が優秀Case Report賞を獲得しました。心臓リハビリテーションにおけるこれら多職種の連携による患者中心の協働治療の実践法について多くの発表をしていただき大変有意義な学会となりました。

最後になりましたが、日頃よりお世話になっております福岡大学医学部同窓会よりご援助いただき誠に有り難うございました。今後とも医療とともに福岡大学医学部の充実や発展に寄与すべく精進致しますので宜しくお願い致します。



第32回日本消化器内視鏡学会九州セミナー、 平成31年1月27日（日曜日）開催報告とお礼

福岡大学 筑紫病院 内視鏡部 教授 八尾 建史（特別会員）

このたび、第32回日本消化器内視鏡学会九州セミナーの会長を務め、平成31年1月27日（日曜日）にJR九州ホールにて同セミナーを開催しました（図1）。募集の定員は600人でしたが、それを上回る602名に参加して頂き、今までで最高の参加者数を得ることができ、成功裡に終わることができました（図2）。特に、高木忠博先生をはじめ烏帽子会の会員の皆様から多大なご支援を頂きましたお

かげで、安心してセミナーの準備と運営を遂行することができました。感謝の言葉が尽きません。今後も研鑽を踏み福岡大学の名に恥じない臨床・研究・教育に引き続き邁進していく所存です。今後とも烏帽子会の皆様のご支援をお願いするとともに、本会の発展を心より念じております。簡単ではございますが、会の報告とお礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。



（図1）第32回日本消化器内視鏡学会九州セミナー運営スタッフ



（図2）セミナー会場の風景。満席でありセミナーの参加者熱心に聴講していた。

学生会員支援報告

白衣授与式を終えて

小川由莉 (M5)

この度は、このような素晴らしい白衣授与式・Student Doctor 認定式を開催していただき誠にありがとうございました。この場をお借りし、5年生を代表して烏帽子会の皆さま並びに福岡大学の先生方に心からお礼を申し上げます。

白衣授与式では、烏帽子会から学生一人ひとりの名前が刺繍された立派な白衣を頂きました。実習といえども臨床に携わる一員であるという責任感と自覚を実感するとともに、これから始まる実習に向けて、期待と不安で身が引き締まる思いです。

さて私達は、これまでの4年間座学を中心に医学を学んできました。基礎医学から臨床医学へと体系的に学んでいき、その医学知識の膨大さに苦労することもありましたが、時には仲間と励ましあい、教えあいながら、無事 CBT・OSCE に合格した 102 名がこ

の式にいどむことができました。

実習が始まったばかりですが、座学で学んだだけの知識では実際に臨床の場では思うようにいかず、医学は複雑であることを実感する日々です。臨床では、複数の疾患が重なりあっており、病態を理解するには患者さんを全体としてみるのが大事なのだと気づかされます。そのためには積極的にベッドサイドに向かい、丁寧な問診・身体診察を繰り返し、患者さんやご家族の思いに傾聴する時間を大切にしたいと思います。実習に協力してくださる患者さんや、指導してくださる先生方、他の職種のスタッフの方々に常に感謝の気持ちを持ちながら真摯に取り組んでいきます。

この実習を通して5年生一人ひとりが成長することをここに誓い、お礼と抱負の言葉とさせていただきます。



白衣授与式

支部だより

大塩善幸先生を囲む会

筑後支部支部長 浅倉 敏 明 (8回生)

大塩善幸先生(4回卒:久留米大塩眼科クリニック理事長)を囲む会を平成30年11月30日にしました。参加者は大塩先輩、奥様(大塩加州子先生:9回卒)、有馬純仁先生(6回卒:大牟田市倉永病院精神科勤務)、奥様 山内祥弘先生(12回卒:久留米市やまうちクリニック院長 現ラグビー部OB会会長)、奥様 浅倉(久留米市浅倉整形外科医院)、私の家内の8名です。場所は久留米市内のホテルマリアー創世でした。有馬先生は私のラグビー部時代の先輩で、大塩先輩とともにラグビー部の創設に尽力されたお方です。先輩はフォワードで活躍され、私がスクラムハーフを任されたときにナンバーエイトとして豪快なプレーをしておられました。OB会で有馬先輩にお会いした際「浅倉、俺も大塩さんに会いたいから声をかけろ」といういきさつがあり、わざわざ福岡市西新からお見えになりました。大塩さんと有馬さ

んは約10年ぶりの再会でお互い顔を合わされた際、固い握手を交わされました。印象的な場面でした。

また同じラグビー部の先輩で私が3年生の時にキャプテンを務められた高嶋研介先生(6回卒:直方市高嶋整形外科院長)に大塩さんへのメッセージをお願いしたところ、快くお引き受け頂き、写真入り、イラスト付きの文章を郵送してくださいました。大塩さんにお渡ししたところ感慨深く読み入っておられました。高嶋さんありがとうございました。^

約2時間ほど大いに酒を酌み交わし、談笑しました。大変楽しいひと時でした。

大塩さんは平成16年に脳梗塞、19年に脳出血を患いましたが、懸命のリハビリで、私ごときの後輩のお誘いに参加して頂いております。

福大医学部ラグビー部の皆様、同眼科学教室の皆様、大塩先生はお元気です。



写真1 大塩さんと有馬さんの再会
左が大塩先生、右が有馬先生



写真2 前列左から大塩加州子先生、大塩善幸先生、有馬純仁先生、奥様
後列左から浅倉、家内、山内祥弘先生、奥様



写真3 高嶋先生からのメッセージ



写真4 高嶋先生の近況

中村卓郎先生の慰労会

筑後支部支部長 浅倉 敏 明 (8回生)

平成30年12月12日に柳川の福泉操にて中村卓郎先生(8回卒:八女市中村内科医院理事長)を囲んで慰労会を行いました。先生は24年間と長い間福岡大学医学部同窓会筑後支部の役員としてご尽力頂きました。その労をねぎらい大城昌平先生(筑後支部顧問 1回卒:柳川市大城医院理事長)、宿里芳孝先生(同副支部長 10回卒:大川市宿里医院理事長)、長井健祐先生(同評議員 12回卒:久留米市長井小児科医院院長)、関幸彦先生(同評議員 12回卒:久留米市行徳内科診療所院長)、私(久

留米市浅倉整形外科医院)の幹部6名で飲み会をしました。中村先生は温かな性格で筑後支部同窓生の信頼も厚いお方です。先生と私は学生時代に麻雀やコンパで一緒に遊んだ仲でした。会は大変盛り上がり酒も進みました。

各人より先生への感謝の言葉をいただきました。私は先生との思い出もあり、少しばかり涙しながらご挨拶致しました。先生これからもお体に気を付けて、我々筑後支部へのご指導、ご鞭撻宜しくお願い致します。長い間ご苦労様でした。



写真1 大城先生による花束贈呈
左が中村先生 右が大城先生



写真2 記念品の贈呈
浅倉と先生



写真3 前列左から大城先生、中村先生、浅倉
後列左から関先生、宿里先生、長井先生

大分県支部会（かぼす会）便り

大分県支部長 鬼木 寛 二（1回生）／日田中央病院

前回は2011年にお便り(講師:3回生 廣瀬 伸一 教授)させて頂きましたが、本当に久しぶりの便りで申し訳なく思っております。

さて、昨年の方も報告させて頂きませんが、同窓会員各位は地域においては立派に医療貢献をされています。7回生の矢田 公裕先生(矢田こどもクリニック)は別府の医師会長に就任され、11回生の小野 隆宏先生(ハートクリニック)は大分県医師会の常任理事に就任されて居られたりで各位が頑張っているようです。まだまだ把握出来ていない部分も有るかと思いますが、福大医学部も成長、発展期に成って来た実感出来る今日この頃です。去年は8回生の湯布院の岩男病院院長の岩男 裕二郎先生のお世話で湯布院の一時を少ない出席者でしたが、講師として6回生の福大筑紫病院 小児科 小川 厚教授に来て頂きミニ講演をして頂きました。この時は初めて27回生の佐伯中央病院 整形外科部長の小寺 隆三先生にも参加して頂きました。

昨年(毎年11月の第3土曜日開催)は「割烹にしおか」(大分市都町)で平成6年6月25日の大分県支部会(愛称:かぼす会)発足以来初めて同窓会長

の高木 忠博先生を講師として来て頂き(診療終了するやいなや、JRソニックでぎりぎり到着)、同窓会の現状と今後をざっばらんに語ってもらいました。いやーっ! 楽しい一時でした。二次会は中村病院 理事長の中村 英助先生にクラブを設定して頂き、高級なワインを賞味させて頂き晩秋の夜の一時を楽しみました。出席者は毎回比較的少ないですが(10人前後)、今回は5回生の明野中央病院 院長の木下 昭生先生にも参加して頂きました。今回は私の不手際で集合写真を撮るのをすっかり忘れてしまいました。出席者:木下 昭生(5回生)、三浦 哲也(9回生)、増井 玲子(3回生)、筑波 貴与根(9回生)、岩男 裕二郎(8回生)、中村 英助(6回生)、市川 弘城(7回生)、難波 美和子(8回生)そして鬼木 寛二(1回生)。

難波 美和子先生には会計を担当して頂き感謝致します。

Ps) 訃報: 生野 雄一先生(9回生) 詳細は不詳で、
家族葬とのことでありました。

御冥福をお祈り致します 合掌



キャンパス便り

《平成 30 年度 烏帽子会賞受章者名簿》

愛好会名	受賞者	受賞対象
バスケットボール愛好会	団 体 表 彰	第 70 回西日本医科学生総合体育大会女子バスケットボール愛好会準優勝
アーチェリー愛好会	柳 邊 崇 志	第 33 回全日本医科学生アーチェリー競技大会 男子個人総合第 1 位
ゴルフ愛好会	長 瀬 愛	2018 年度七校戦 女子個人準優勝及び新人賞
準硬式野球愛好会	団 体 優 勝	平成三十年医歯薬秋季リーグ戦優勝
CMe t 準愛好会		第 4 回全国医学生 BLS 選手権大会九州地区予選総合第 1 位。 全国大会成人：胸骨圧迫(Standard)+人工呼吸+AED部門第 1 位

第 70 回 西医体準優勝のご報告

福岡大学医学部 女子バスケットボール愛好会 八 代 明 奈 (M4)

はじめに、栄誉ある烏帽子会賞を受賞させていただき、誠にありがとうございます。

この度、昨年 8 月に行われました第 70 回西日本医科学生総合体育大会女子バスケットボール部門において、準優勝致しましたのでご報告させていただきます。

女子バスケットボール部は、今回だけでなく歴代の先輩方により輝かしい成績を収めており、今年も含めると 5 年連続で烏帽子会賞をいただくことになりました。

た。毎年の烏帽子会総会で先輩先生方からいただきご支援・激励のお言葉には感謝してやみません。本当にありがとうございます。

今大会は 30 チームが出場し、トーナメント戦で負けることのできない緊張感のある大会でした。バスケットボールは、5 人でボールを繋ぎ得点を奪い、5 人でゴールを守る、攻守の切り替えが早い、スピードも体力もチームワークも必要なスポーツです。プレイヤーも 7 人しかおらず、きつい場面も多々ありました。



が、1人1人がチームのために自分がすべきことを考えやり遂げられたことが勝利に繋がったのだと思います。最後の決勝戦は敗北に終わり悔しい思いをしましたが、この敗北を次に繋げていけるよう日々精進していきます。

最後になりましたが、日頃よりあたたかい応援や多大なるご支援を下さるOB・OGの先輩方、一緒に練習してきた部員にこの場をお借りして御礼申し上げます。今後とも部員一同より良い愛好会を目指していきますので、よろしくお願い致します。



全医体優勝のご報告

福岡大学医学部 アーチェリー愛好会 柳 邊 崇 志 (M5)

8月1～3日に行われました第33回全日本医科学生アーチェリー競技大会において、個人総合優勝・長距離部門1位・中距離部門1位を獲得できましたので、ご報告させていただきます。7月に行われました烏帽子会総会におきましては、今大会に向けての激励をいただきましたこと、日頃より様々応援・サポートしていただいていることと合わせ、改めて先輩先生方には感謝してやみません。

今大会は愛知県にて行われました。連日40度を超える気温・雲一つない晴天の中で行われた大会は、今までに経験したことのない過酷なものとなりました。熱中症での棄権も相次ぐ中、福大勢が誰一人かけることなく試合を乗り切れたことをうれしく思います。

アーチェリーは、70m/50m/30mの距離、計144射2日間の合計点で競われます。上位で争うにあたっては、1日4時間の試合中、手元では0.1mmでの



調整をひたすら繰り返すこととなります。平成最後の
大舞台ということで、優勝を狙って練習してまいりま
したが、気温が40度を超える環境下で普段通りの力を
発揮することは困難でした。制限時間の中で、より高
い点数にあてるために考え続けなければならない頭は
ぼーっとし、弓を持つ手には力が入らず、「今の点数
なら入賞は間違いなし、もう手を抜いてもいいだろ

う」という誘惑にかられる場面もありました。

自分の意志の力だけで、最後まで手を抜かずに戦
うことはできなかったと思います。折れず、あきらめ
ず、結果として優勝することが出来たのは、日頃
から様々応援いただいている先輩先生方の存在があ
ったからです。本当にありがとうございました。

平成三十年秋季リーグ戦 優勝

福岡大学医学部 準硬式野球愛好会 中 谷 裕 貴 (M4)

2018年9月下旬から10月中旬にかけて医歯薬
秋季リーグ戦が開催され、全勝優勝することができ
ました。チーム一丸となって戦った結果に、部員一
同大変喜んでおります。またこの度、烏帽子会総会
におきまして表彰していただけることはとても光栄で
あります。日頃より応援・サポート頂いていることに心
より感謝申し上げます。

準硬式野球部は、昨年の九州・山口医科学生体育
大会では準優勝、西日本医科学生体育大会ではベ
スト16、と着々と実力をつけて参りました。このチー

ムをこのタイミングで新主将として率いることは、とて
も荷が重く不安でしたが、前主将の橋川先輩や同級
生に助けられ、医歯薬秋季リーグ戦を全勝し、6年
ぶりに優勝することができました。授業が終わってか
ら夜遅くまで練習し、休日にも練習試合などで勉強の
時間があまりとれない中、学業と両立して大きな力と
なって下さった上級学年の先輩方に大いに感謝した
いと思います。今年の九山大会では、昨年の準優勝
を超えぜひとも優勝を、また西医体でもベスト8を目
指し、皆で力を合わせて頑張りたいと思います。



最後になりましたが、今自分たちがこうして野球を続けられるのは多くの方々の支えがあったからこそだと思っています。烏帽子会の皆様、野球部 OB 会の皆様、藤沢監督、関係者の皆様、野球部を代表致しましてお礼申し上げます。これからもより一層練習に励んで参りますので今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくをお願いします。本当にありがとうございました。



烏帽子会賞を受賞して

福岡大学医学部 ゴルフ愛好会 長 瀬 愛 (M2)

はじめに、栄誉ある烏帽子会賞を頂きました事を厚く御礼申し上げます。この度、2018年度七校戦において女子個人準優勝に加え、新人賞を頂きました事をご報告いたします。

私にとって入学後初めての大会であり、ゴルフ経験者として結果を残さなければというプレッシャーを背負ったとても緊張感のある大会でした。大会は練習ラウンドと本番の2日間に亘って開催されました。初日の練習ラウンドとレセプションで他大学の学生とも交流を深め、大会本番である2日目はリラックスした状態で臨むことができました。本番のスコアは前半41、後半41のトータル82でした。個人的には受験期間の1年間のブランクを考えると納得できるスコアでしたが、1位との差がたった1打だったということが非常に悔やまれます。まだまだ改善すべきところがたくさんあるため、学問と両立しながら部活外でも練習を積み重ね、次の大会では優勝を目指します。また、いつも優しく見守ってくださる先輩方がいるゴルフ部に入れて本当に良かったと感じます。来年度は

後輩も入るため、しっかりの指導も出来るよう励みたいと思います。



第四回全国医学生 BLS 選手権を通して ～九州予選：総合優勝、全国大会：部門優勝～

福岡大学医学部 CMeT 準愛好会 大牟田 陽 俊 (M5)

今回、参加させていただいた第四回全国医学生 BLS 選手権について報告させていただきます。BLS とは、Basic Life Support の略で 1 次救命処置と言われる心肺蘇生と AED の適正な評価を行うことです。

参加したメンバーは、CMeT (Clinical Medicine Training) 準愛好会の医学科 4 年の大牟田 陽俊、3 年の濱田 利尚、小池 明生、1 年の粟津 遼、看護科 2 年の甲能 久美子です。2018 年 8 月 11 日に九州予選、11 月 3 日に全国大会が行われました。九州予選は福岡大学メディカルホールで行われ、九州内 4 大学が参加し、1 人での競技が 2 つと 3 人での競技が 1 つありました。その中で総合優勝を飾りました。その後の全国大会は国際医療福祉大学東京赤

坂キャンパス体育館で全国から 14 大学が参加しました。成人部門 (Standard)・成人部門 (Hard)・乳児の 3 つの部門があり部門ごとの評価と総合評価がありました。その中の成人部門 (Standard) で優勝を飾ることができました。

予選大会・全国大会の練習に福岡大学医学部救急センターの全面的な協力をいただき、多くの練習をさせていただきました。また、全国大会出場に関して医学部長・医学部内の多くの先生方からの支援をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

来年度は、より多くの部門の入賞を目指したいと思います。これからもよろしくお願いいたします。



九州大会の様子です



全国大会の様子です

福岡大学医学部同窓会 烏帽子会賞褒賞基準

1. (目的)

福岡大学医学部同窓会(以下烏帽子会という)は、その所属する学生会員が対外試合または活動において優勝し或いは優秀な成績を収めた場合、その団体または個人に対し、その栄誉を讃え賞状、賞金または賞品を授与してこれを表彰する。

2. (賞の名称)

この賞を烏帽子会賞という。

3. (対象試合等) 表彰の対象となる試合または活動とは、概ね西日本医科学生総合体育大会、九州 山口医科学生体育大会を含むその規模以上のものを云い、内容は単に体育関係のみならず学術、芸術等多岐に亘るものとする。

4. (申告書の提出) 烏帽子会は烏帽子会が表彰に値すると認めた団体または個人、或いは自ら表彰を希望する団体または個人に対し、烏帽子会賞申告書及び賞状の写しをを提出させる。

5. (表彰の審査)

表彰の審査及び賞金額の決定は理事会において行う。

賞金または賞品の支給基準額は別表の通りとする。

6. (表彰) 表彰は総会、理事会等の席上で行い賞金を授与し会報に掲載する。

付則 1, この基準は平成 18 年 4 月 1 日から施行する。

2, この改正基準は平成 22 年 1 月 15 日から施行する。

別表) 烏帽子会賞の基準(学術部門)

		学会全国	学会地方会	その他
団体	優勝	50,000 円	30,000 円	その都度判定
	準優勝	40,000 円	20,000 円	その都度判定
	3 位	30,000 円	10,000 円	
個人	優勝	30,000 円	20,000 円	その都度判定
	準優勝	20,000 円	10,000 円	その都度判定
	3 位	10,000 円		

※シムリンピック 学会全国充当

CPR 選手権大会九州ブロック=学会地方会充当

CPR 選手権大会全国ブロック=学会全国充当

別表) 烏帽子会賞の基準(愛好会部門)

		西医体	全医体	九山	その他
団体	優勝	50,000 円	30,000 円	30,000 円	その都度判定
	準優勝	40,000 円	20,000 円	20,000 円	その都度判定
	3 位	30,000 円			
	4 位	20,000 円			
個人	優勝	30,000 円	20,000 円	20,000 円	その都度判定
	準優勝	20,000 円	10,000 円	10,000 円	その都度判定
	3 位	10,000 円			
	4 位				

※但し烏帽子会賞は同一大会に 1 個とし、上位の成績を表彰する。

参加チーム数の少ない場合は理事会にて減額することができる。

5 年連続受賞においては殿堂入りと賞し賞状を授与する。

訃報

正会員	相良勝臣先生	令和元年 5月 2日	ご逝去 (3回生)
正会員	生野雄一先生	平成31年 1月 20日	ご逝去 (9回生)
正会員	赤井護先生	平成31年 1月 19日	ご逝去 (10回生)
正会員	三浦康志先生	平成31年 4月 5日	ご逝去 (11回生)
特別会員	坂本公孝先生	平成30年 11月 7日	ご逝去
特別会員	江崎廣次先生	平成30年 11月 13日	ご逝去
特別会員	古川達郎先生	平成31年 4月 15日	ご逝去

坂本公孝泌尿器科名誉教授を偲んで

社会医療法人財団 白十字会 白十字病院 泌尿器科 吉田 一博 (5回生)

福大泌尿器科同門会(有朋会)長の吉田一博(昭和57年卒)と申します。

坂本名誉教授が11月7日90歳でご自宅でご逝去されました。ご子息の泌尿器医 坂本直孝先生によれば死因はがん(食道がん、咽頭がん、胃がん、前立腺がんは早期)でなく、坂本名誉教授は高齢のためご自宅で療養されていましたが、2年前より寝たきりとなり、11月7日7時ごろ眠るように永眠された。大往生であったそうです。

坂本名誉教授の専門は小児泌尿器科で後継者の大島教授、松岡准教授と脈々と受け継がれており、九州各地より患者さんを集めております。在職中に泌尿器科専門医四十数名、学位取得者二十数名を数えました。福大泌尿器科教授のときも医局員に対しコピーされた文献を渡され、私たちは拝読しておりました。坂本名誉教授は平成8年(1996年)教授職を辞された後、有朋会員が主催する勉強会(城南ウロカン、筑豊ウロカン、西部会)でアドバイザーとして出席され、会員は坂本名誉教授のご意見を拝聴してきました。11月3日坂本教授のお見舞いにご自宅にお邪魔した時その時もベッド横に学会誌が置いてありま

した。生涯、泌尿器医師として私利私欲にとらわれず、勉強のみ続けられたと思います。

坂本名誉教授の人となりについて一言だけふれることをお許し頂けますなら清廉潔白です。患者さんから渡された手術の謝礼を医局費として納入されておりました。大学在籍中は寡黙な教授の印象ではありませんでしたが、退職後、教授という重責から開放されたためか、飲み会では楽しく飲まれていました。

2002年より耳鼻科曾田名誉教授を中心に福大教授を退職された7人の1人として無料健康相談(養生相談室)で患者さんの健康相談に乗られました。その経験から「医療不信を招く責任の多くは患者側にあるように思えるが、私共が医師という職業を選んだ以上、責任のなすり合いは許されない。複雑な患者の悩みを理解し、心を通わせた診療に心がけて欲しいと願う今日この頃である。」と述べられています。

天高くから福大泌尿器科を俯瞰され、これからも我々の心の中でご助言を下さることと信じています。

長い間ご指導いただき有難うございました。心からご冥福お祈り申し上げます。

追想 坂本公孝名誉教授

福岡大学医学部 泌尿器科学 准教授 松岡弘文 (8回生)

坂本公孝名誉教授（以下、教授）の訃報に接し、私は不意に大学の卒業アルバムを見たい衝動に駆られた。30年以上本棚の奥に埋もれていたそれを探しだし、埃を払いながら開いてみると、若々しい教授とその後ろに並ぶSGT12班員の面々の中に自分の姿も見出した。そう、この時すでに泌尿器に入局するように運命づけられていたのだ・・・と何となく納得しながら坂本教授の思い出を辿ってみた。

大学に残るつもりも泌尿器科医になることさえ選択肢になかった私の将来を決めることになったのはM5の夏休み中に泌尿器科医局に入局するようになった時に遡る。私は坂本教授在任期間の後半しか存じ上げないが、この頃の坂本教室はまだ初々しさを保ちながらも既に充実した教室体制が築かれていた。診療・研究体制のレベル、手術手技完成度の高さについては当然ながら、それにもまして坂本教授のもとに人心が掌握され、規律正しく、それでいて何か家庭的な雰囲気のある教室に強く魅力を感じた。少なくとも人間関係に悩む恐れは全くなかった。

研究体制は、教室で確立された不完全尿路閉塞実験モデル犬を使ったテーマに複数の大学院生が取り組んでいたが、そのほか尿路結石の成因については既に学会賞を受賞した先輩がいたし、逆流性腎症の研究も走り始めていた。臨床面では尿路変向についての臨床的研究が積極的に行われていたが、同時に多くの手術例を抱えて、福大単独の患者会も結成されていた。どの道に進んでも充実した臨床・研究が行えそうであったが、私は当教室の柱の1つである小児泌尿器科関連の中から逆流性腎症の研究テーマを頂いた。研究中はリサーチミーティングや



セミナーなどで公式にアドバイスを受けたが、他にも日常の医局で廊下で、そして時にはトイレでも顔を合わせると小さな助言を頂くことがあって、むしろこちらの方が参考になったり勇気づけられたりで今でも記憶に残っている場面が多い。研究開始の頃には方向性すら混沌としていて厳しい助言が多かったが、3年目の終盤に「これでいこう」と言われたときには大いに勇気づけられたものであった。大学院修了後も「参考までに」と付箋の貼られた英語論文のコピーが折に触れて机の上に置かれており、無言のアドバイスを頂いた。教授退任後はもちろん論文のチェックを受けることもこちらから相談することもなかったが、時に「参考までに」が送られてくるのが有った。しばしば未読であったため、大いに恥じ入り、また鼓舞された。ほんの4年程前には、総会で「記録すべき20世紀の業績」と題した名誉企画の1つにエントリーされ、私に発表の機会を頂いた。実に30年以上もずっと導いて下さったとの感を強くしたものであった。

日常診療では開局以来の全ての当科患者情報を記憶されているのではないかとと思われる場面にちよくちよく遭遇し、的確な指示を頂いた。そういえば医局員の結婚式でも前日のレクチャー情報だけで両家の仲人紹介を20年来のつきあいのごとくスピーチされるなど記憶力抜群でお話もお上手であった。一方で生活は清廉・質素で有り、何か武士道に通じるような気高さを感じた。リーダーとはこうあるべきというような1つの形を示して頂いたと思っている。

自分自身は坂本教授のようにはなれなかったもので、自らにその教えを体現することはかなわなかったが、



それでも「坂本教授ならこの場面ですうされるだろうか?」と考えながら答えを出すことがしばしばあり、これからも“坂本基準”を持ち出すことがあると思っている。

最近は臥床の時間が長いとは聞こえていたが、枕元には常に学会雑誌や論文があつて勉強を怠らなかつたとも伺っていた。前日、同門会(有朋会)長が自らの釣果を捌いて差し入れた魚を普通に召し上がった、朝には息を引き取られていたとのことであった。その様子を想像しながら20年前福大を退職された時

を思い出した。引っ越しのお手伝いをしようと待ち構えていた我々を尻目に、1年間毎日ショルダーバッグに少しずつ本などを詰めて持ち帰り、退職時には教授室は空になってしまっていたのだった。引き際も素晴らしく、今回も見事な最期であった。

教授職に在任中も、退職後も、長きにわたりご指導を頂き、そして、これからの精神的支柱も残して頂いた坂本公孝教授に深く深く感謝申し上げる次第である。安らかにお眠り下さい。合掌

江崎 廣次 教授を偲んで！

医療法人 きょうゆうかい 杏友会 院長 ま 馬 ごおり 郡 よし 良 ひで 英 (1回生)



平成30年11月、福岡大学医学部衛生学教室の初代主任教授の江崎廣次先生がご逝去されました。大正14年(1925年)生まれの享年93歳でした。江崎先生は、久留米大学医学部を卒業され、国立公衆衛生院で学びながら、福岡県衛生部に所属され県内の各保健所勤務。昭和36年(1961年)、久留米大学公衆衛生学講座助教授を経て、昭和49年(1974年)福岡大学医学部衛生学教室の初代主任教授に就任されました。昭和53年(1978年)、我々医学部1回生が卒業した年より大学院医学研究科指導教授となられ、専門の人口保健統計や農村医学はもとより、民族衛生、産業保健、保健行政やその他幅広くされていて、これらの学会の理事、幹事、学会長等も務められ、平成4年(1992年)には第57回日本民族衛生学会会長をされ、そして多くの業績や基礎医学の人材

を育成し、教室の発展にご尽力され平成8年(1996年)に退任されました。

私が初めて江崎先生にお教いただきお会いしたのは、4年生の講義の時で、昭和50年(1975年)でした。その時は、その後昭和57年(1982年)に大学院生としてお世話になるとは思っておりませんでした。卒後、福大第一内科奥村教授(消化器科内科)の下で臨床研修し、以前よりこれからの医療は予防医学の必要性を感じ、フィールドワークが大事であるとの思いで衛生学教室大学院に進みました。隣りの教室には、当時から同じ分野で教室同士行き来があった公衆衛生学で助手をしていた同級生の増田登君がおり、また、教室も仲吉、大園、渡辺や百瀬先生達がおられ、小生を含めて11名と開講して8年目にして発展の時期到来の感があり、その中で、福岡市西区北崎の花弁栽培農家の健康調査、農作業実態調査、農薬散布暴露量測定など農村医学調査研究を行いました。フィールドワークは、その地区住民の健康調査も並行し、3年間、農家の仕事始めは早く、早朝より採血検査等を行い、特に冬場の早朝6時の採血には苦勞の連続でした。教授のご指導、ご支援で、「花卉ハウス栽培従事者の健康状態に関する調査研究」で医学博士の学位を授与されました。江崎先生は、本当に温厚で優しく、日本酒が大好きで、日本全国の学会開催地での地酒にも蕙蓄詳しく、23

時にはお開きになるけじめをしっかりとされ、教授室はいつも整理整頓されていました。小生も先生のこの姿勢を今、実行に移している次第です。先生の下に、フィールドワークで学んだ事をもとに、昭和63年(1988年)より父と共に、平成12年(2000年)1月から父の後を受け継ぎ開業しました。地域住民の為、患者の気持ちがわかる優しい地域医療目指し診療し、飯塚医師会会長、福岡県医師会理事等貴重な経験

もさせていただきました。

この稿にあたり、ご資料等を提供していただいた百瀬先生、仲吉先生に謝辞し、また、教授と親交の深かった多くの皆様方にも深く感謝祈念申し上げます。最後に、今は亡き江崎先生ご尊顔を拝し、先生を偲び謹んでご冥福をお祈り致しますと共に、これまでのご指導とご尽力に感謝する次第です。合掌！



医局長・医長名簿

(○内の数字は福大医学部卒業回)

平成31年4月現在

	医 局 長	病棟医長	外来医長
[福岡大学病院]			
腫瘍・血液・感染症内科	田 中 俊 裕 ①⑦	佐々木 秀 法	茂 木 愛 ⑤
内 分 泌・糖 尿 病 内 科	田 邊 真 紀 人	濱之上 暢 也 ③②	元 永 綾 子 ②⑦
循 環 器 内 科	岩 田 敦 ②⑩	森 井 誠 士 ②⑥	有 村 忠 聰 ②⑧
消 化 器 内 科	横 山 圭 二 ②②	船 越 禎 広 ②③	高 田 和 英 ②⑤
呼 吸 器 内 科	青 山 崇	井 形 文 保 ③④	串 間 尚 子
腎 臓・膠 原 病 内 科	伊 藤 建 二 ②⑤	永 室 尚 子	安 野 哲 彦 ②④
血 液 浄 化 療 法 セ ン タ ー		升 谷 耕 介	
脳 神 經 内 科	合 馬 慎 二 ②③	藤 岡 伸 助 ②⑥	小 倉 玄 睦 ③⑤
精 神 神 經 科	衛 藤 暢 明	原 田 康 平	飯 田 仁 志 ③②
〃 (デ ィ ケ ア)			永 野 健 太
小 児 科	石 井 敦 士 ③⑩	太 原 鉄 平 ③⑩	佐々木 聡 子 ③⑩
消 化 器 外 科	塩 飽 洋 生 ②⑥	加 藤 大 祐 ②④	石 井 文 規
呼 吸 器・乳 腺 内 分 泌・小 児 外 科	宮 原 聡	早 稲 田 龍 一	今 村 奈 緒 子
整 形 外 科	木 下 浩 一 ②⑥	坂 本 哲 哉	田 中 潤
形 成 外 科	稲 本 和 也 ③⑤	上 木 原 達 哉	山 口 崇 之
脳 神 經 外 科	野 中 将 ①⑥	松 本 順 太 郎 ③②	三 木 浩 一
心 臓 血 管 外 科	峰 松 紀 年	林 田 好 生 ②⑩	松 村 仁
皮 膚 科	柴 山 慶 継 ②⑦	山 口 和 記	内 藤 玲 子
腎 泌 尿 器 外 科	入 江 慎 一 郎 ①⑦	松 崎 洋 史 ②⑦	古 屋 隆 三 郎 ②③
産 婦 人 科	宮 原 大 輔 ②⑩	倉 員 正 光 (産科)	荒 木 陵 多 ②⑧
〃		南 星 旭 ②⑧(婦人科)	
眼 科	佐 伯 有 祐	岡 村 寛 能	高 橋 理 恵
耳 鼻 咽 喉 科	大 西 克 樹 ②⑤	竹 内 寅 之 進	妻 鳥 敬 一 郎 ③②
放 射 線 科	浦 川 博 史 ①⑤	赤 井 智 春 ②⑦	野々熊 真 也 ②④
麻 酔 科	岩 下 耕 平	平 井 規 雅	柴 田 志 保 ②⑥
歯 科 口 腔 外 科	瀬 戸 美 夏	近 藤 誠 二	喜 多 涼 介
病 理 部	濱 田 義 浩 ①④		
臨 床 検 査 部	大 久 保 久 美 子		
輸 血 部	熊 川 み どり		
救 命 救 急 セ ン タ ー	入 江 悠 平 ③①	水 沼 真 理 子	
総 合 周 産 期 母 子 医 療 セ ン タ ー		太 田 栄 治 ①⑨(新生児部門)	
〃		岩 中 剛	
総 合 診 療 部	増 井 信 太 ②⑨	日 吉 哲 也	崎 原 永 志 ③③
東 洋 医 学 診 療 部	坂 本 篤 彦		
薬 剤 部			
臨 床 研 究 支 援 セ ン タ ー			
卒 後 臨 床 研 修 セ ン タ ー			
[福岡大学筑紫病院]			
筑 紫 病 院 (総 医 局 長)	岡 村 圭 祐 ②④	(救 急 科)	
循 環 器 内 科	白 井 和 之 ⑧	岡 村 圭 祐 ②④	山 本 智 彦 ③⑩
内 分 泌・糖 尿 病 内 科	工 藤 忠 睦 ②③	阿 部 一 朗	小 林 邦 久
呼 吸 器 内 科	赤 木 隆 紀 ②①	宮 崎 浩 行	竹 田 悟 志 ②⑨
消 化 器 内 科	※野 間 栄 次 郎 ①⑧	大 津 健 聖 ②⑧	高 津 典 孝
小 児 科	吉 兼 由 佳 子 ①⑨	平 井 貴 彦 ③⑥	堤 信 ②④
外 科	平 野 公 一 ②①	小 島 大 望 ②⑥	吉 田 康 浩 ②④
整 形 外 科	秋 吉 祐 一 郎	南 川 智 彦	藁 川 創 ③⑩
脳 神 經 外 科	井 上 律 郎 ②⑨	新 居 浩 平 ②④	井 上 律 郎 ②⑨
泌 尿 器 科	平 浩 志 ①⑤	平 浩 志 ①⑤	宮 島 茂 郎 ②②
眼 科	藤 田 秀 昭	藤 田 秀 昭	山 口 宗 男
耳 鼻 い ん こ う 科	杉 山 喜 一 ③①	杉 山 喜 一 ③①	梅 野 悠 太 ③④
放 射 線 科	山 本 良 太 郎 ②②		
救 急 科	岡 村 圭 祐 ②④		
麻 酔 科	若 崎 る み 枝		
病 理 部	原 岡 誠 司		

※印は循環器内科、内分泌・糖尿病内科、呼吸器内科、消化器内科の代表医長

教育職員人事（講師以上）

（○内の数字は福大医学部卒業回）
〔平成 30.10.2 ～ 31.4.1〕

区分	所属	資格	氏名	発令日	摘要
退職	整形外科	講師	佐伯和彦 ⑮	30.12.31	
	総合医学研究センター	教授	中山樹一郎	31. 3.31	定年退職
	総合医学研究センター	教授	安波洋一	31. 3.31	定年退職
	総合医学研究センター	教授	渡辺憲太郎	31. 3.31	定年退職
	内分泌・糖尿病内科学	教授	柳瀬敏彦	31. 3.31	定年退職
	麻酔科学	教授	山浦健	31. 3.31	
	臨床医学研究センター	教授・筑紫病院長	向野利寛	31. 3.31	定年退職
	筑紫外科	教授	前川隆文 ②	31. 3.31	
	筑紫外科	准教授	三上公治 ⑬	31. 3.31	
	筑紫眼科	准教授	大島裕司	31. 3.31	
	精神医学	准教授	尾籠晃司	31. 3.31	定年退職
	呼吸器・乳腺内分泌・小児外科	講師	濱武大輔 ⑳	31. 3.31	
	産婦人科	講師	伊東裕子 ㉑	31. 3.31	
	筑紫循環器内科	講師	光武良晃 ㉕	31. 3.31	
	総合診療部	講師	堀端謙	31. 3.31	
生理学	講師(4-7)	倉原琳	31. 3.31		
衛生・公衆衛生学	講師(4-7)	辻雅善	31. 3.31		
筑紫麻酔科	講師(4-7)	平田和彦 ⑫	31. 3.31	定年退職	
採用	腫瘍・血液・感染症内科学	教授	川浪大治 ㉑	31. 4. 1	
	麻酔科学	教授	秋吉浩三郎	31. 4. 1	
	寄付研究連携応用再生医療開発講座	准教授	坂田直昭	31. 4. 1	
	筑紫耳鼻いんこう科	准教授	澤津橋基宏	31. 4. 1	
	筑紫眼科	准教授	久富智朗	31. 4. 1	
薬理学	講師(4-7)	根本隆行	31. 4. 1		
昇格	消化器内科学	教授	平井郁仁 ⑭	31. 4. 1	
	小児科学	准教授	石井敦士 ⑳	31. 4. 1	
	産科婦人科学	准教授	四元房典	31. 4. 1	
	歯科口腔外科	准教授	梅本丈二	31. 4. 1	
	眼	准教授	尾崎弘明	31. 4. 1	
	救命救急センター	准教授	喜多村泰輔 ⑯	31. 4. 1	
	小児科	准教授	野村優子 ㉑	31. 4. 1	
	呼吸器内科	准教授	松本武格 ㉑	31. 4. 1	
	産婦人科	准教授	村田将春	31. 4. 1	
	腎臓・膠原病内科学	講師	安野哲彦 ㉒	31. 4. 1	
	脳神経内科学	講師	藤岡伸助 ㉒	31. 4. 1	
	脳神経外科	講師	福田健治	31. 4. 1	
	循環器内科	講師	志賀悠平 ㉒	31. 4. 1	
	産婦人科	講師	南星旭 ㉓	31. 4. 1	
	呼吸器・乳腺内分泌・小児外科学	講師(4-7)	今村奈緒子	31. 4. 1	
	小児科学	講師(4-7)	藤田貴子 ㉑	31. 4. 1	
	循環器内科	講師(4-7)	有村忠聴 ㉓	31. 4. 1	
産婦人科	講師(4-7)	深川怜史 ㉓	31. 4. 1		
呼吸器・乳腺内分泌・小児外科	講師(4-7)	宮原聡	31. 4. 1		
筑紫循環器内科	講師(4-7)	高宮陽介 ㉒	31. 4. 1		

事務局からのご連絡

- ◆会報を広く情報伝達の場に…医学部、病院、同窓会、会員、それぞれの人が、それぞれの相手に蟠りなく伝えて欲しいと願っています。教室、部門紹介など、何時でも何度でも何回でも投稿下さい。広く、躍動する情報テーブルになればと願っています。
- ◆4月から研修をスタートされた先生、勤務先が変わられた先生は同窓会へお知らせ下さい。先輩や後輩が歓迎会や講演会などの連絡を差し上げたいとのことです。会報にあります住所・勤務先連絡票にて事務局までお願いいたします。



FU-OMSA

Fukuoka University - Outstanding Medical Student Award

2019.4.1. Les Celebrities



編集後記

新元号に変わり、令和最初の『烏帽子会会報』です。平成から令和へ変わるタイミングに新教授の先生方の顔ぶれを拝見し、福岡大学医学部にも新時代の幕開けを予感します。

消化器内科学の平井郁仁先生と内分泌・糖尿病内科学の川浪大治先生は福岡大学の同窓生であり、母校出身の教授が増えることに大きな喜びを感じます。また、個人的なことで恐縮ですが、麻酔科学の秋吉浩三郎先生と筑紫病院外科の渡部雅人先生は久留米大学附設高等学校出身であり、福岡大学医学部附設会でご一緒できることを楽しみにしております。

一方で、大変お世話になった先生方が退任されることに寂しさを覚えます。しかし、これからも何かとお世話になることが多いと存じますので、今後とも宜しく願いいたします。

元号が変わるからといって日常が変わるといってもないのですが、これを機に何かチャレンジしようと考えられている同窓生の先生方も多いのではないのでしょうか。令和が福岡大学医学部及び同窓生の先生方にとりまして、素晴らしい時代になりますことを祈念いたします。

医療法人 栄社会 しもじ内科クリニック 下地 栄壮 (20回生・広報担当理事)

烏帽子会会報第66号

発行日 2019年6月1日
 発行人 高木 忠博
 編集人 小玉 正太

発行所 〒814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1
 福岡大学医学部同窓会
 電話:092-865-6353(直通)
 092-801-1011(代表) 内線[3032]
 FAX:092-865-9484
 E-mail:eboshi@eboshikai.jp

印刷所 ロータリー印刷株式会社
 福岡市中央区長浜2-1-30
 電話:092-711-7741
 FAX:092-711-7901